

REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,
KANAGAWA UNIVERSITY

RAK
vol.14

【特集】私たちのキャンパスの建築





目次

・特集 私たちのキャンパスの建築……………	1
横浜キャンパスと20のシーン……………	2
神奈川大学横浜キャンパスの概要……………	3
シーン20 ……………	4
キャンパス建築ガイド ……………	24
特集後記 ……………	28
・2017年度学生優秀作品紹介……………	29
修士論文 ……………	30
卒業設計・論文 ……………	47
総評 ……………	64
全作品リスト……………	67
学部設計課題優秀作品……………	69
・NEWS……………	89
課外活動・学外コンペ受賞作品……………	90
留学生レポート……………	92



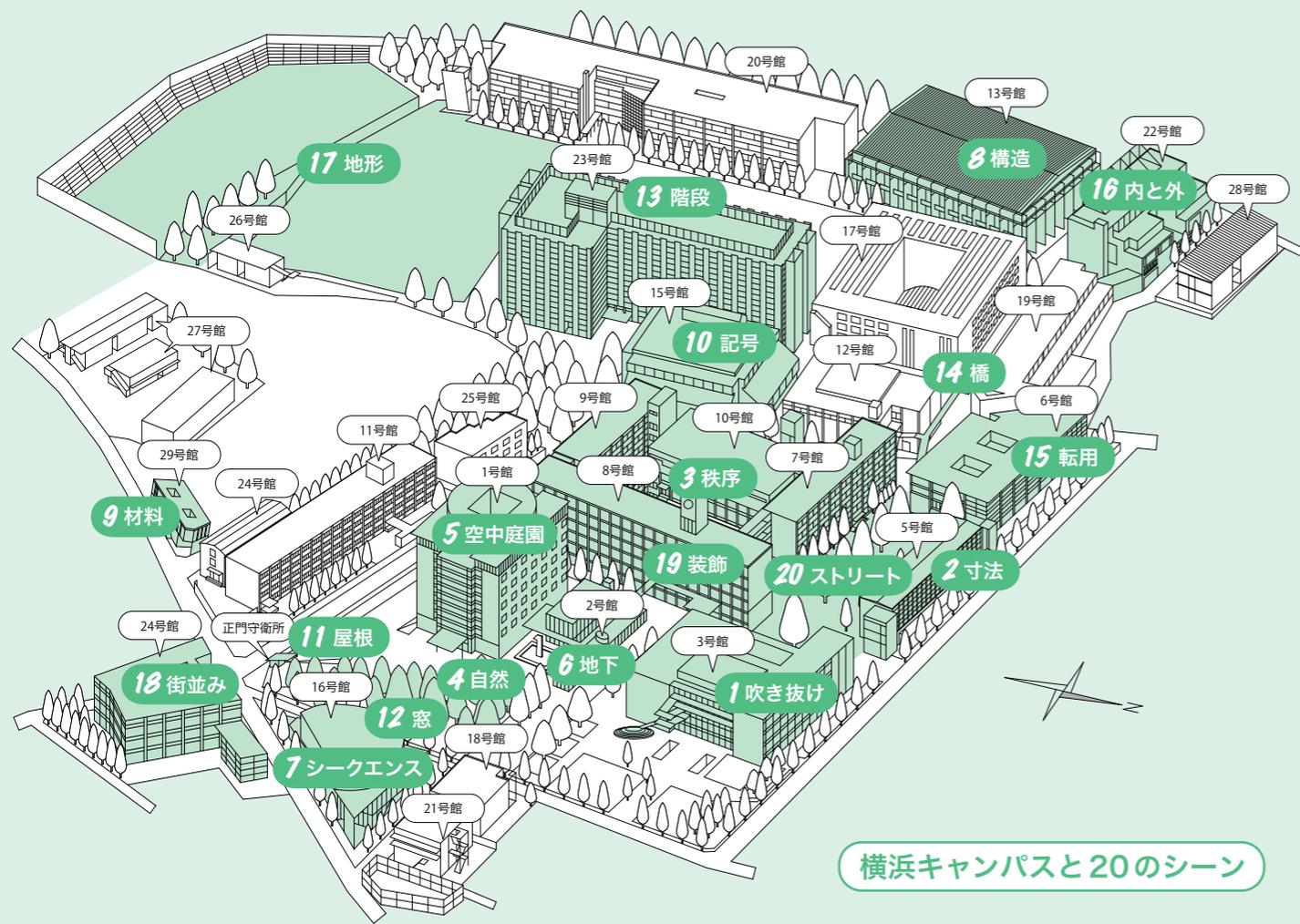
【特集】私たちのキャンパスの建築

19号館（設計=RIA、1994年竣工）

今年度のRAKUでは、学生たちが主体となって特集を制作しました。横浜キャンパスの空間のなかから20の特徴的なシーンを見だし、それぞれにキーワードを付けて、その建築的な意味を考察するというものです。この目的は大きくふたつあります。

ひとつは、神大の前身である横浜専門学校がこの土地に移転してから88年、さまざまに移り変わってきたキャンパスの現在を捉えるということ。各時代に建てられたキャンパスの建築を知ることとは、大学の歴史を知ることでもあるでしょう。その助けとなるような、現時点でのキャンパス建築ガイドを目指しました。

もうひとつの目的は、私たちにとって身近な建築的環境にあらためて目を向けるということです。キャンパスの建築は、建築メディアを賑わせるような斬新な作品ばかりではありません。しかし、その時々の実践的な必要や切実な条件のなかで建てられてきた建築は、深いところで建築の文化に根ざしているはず。そして自分たちが日常で接している建築だからこそ、建築の専門的な概念や流行の言葉づかいからいったん離れて、建築そのものと向き合うことができると思います。この建築そのものと向き合うというシンプルな行為の大切さを、特集の作業を終えようとする今、むしろ以前よりも強く実感しています。



横浜キャンパスと20のシーン

神奈川大学横浜キャンパスの概要

文=中井邦夫/教授

神奈川大学のメインキャンパスである横浜キャンパスは、横浜市神奈川区六角橋の住宅地に位置している。最寄りの東横線白楽駅から横浜駅までは約5分、渋谷駅までは約30分と交通の便は良い。敷地面積は約9haで、首都圏私大の都市型キャンパスとしてはほぼ平均的な広さといえる[*1]。キャンパス全体は、東側の「本部地区」、そこと道路で隔てられた西側の「グラウンド地区」およびその他のいくつかの飛び地の敷地と、それらに建つ約30棟の建物群から成る。

本キャンパスの歴史は、今から約90年前の1930年に、本学の前身である横浜専門学校がこの地へ移転してきたことから始まる。そのきっかけは、当時校地を探していた創設者の米田吉盛が、注目されていた開通直後の東横線沿線に位置し横浜を望めるこの丘陵地(宮面ヶ丘)を気に入ったためといわれる。

戦後の1949年に新製の神奈川大学に昇格したことを機に、開学当時からの木造校舎群を刷新するべくキャンパスの整備拡充計画が構想され、1954年の設計競技にて、RIA建築総合研究所(山口文象ほか)による「神奈川大学総合計画案」が採用、実施されることとなった。1969年に一応の完了をみた同計画案を踏まえた建物1~13号館のうち、5号館以降の番号の建物群は現存している[*2]。

その後もRIAの設計によって、1980年竣工の現図書館(15号館)を含めて1988年の20号館まで、校舎群が約2年に1棟ずつ建設されていったが、この時代のRIAのデザインは、初期のものとは異なり、全般的にラーメン構造よりも壁面の表現が

強くなっている。また、1996年に榎文彦設計による16号館が建設された。

大学創立70周年にあたる1998年に「横浜キャンパス再開発計画」が発表され、本キャンパスは大きく変貌することとなった。とくに道路で隔てられている東西の地区を神大橋でつなぎ一団地とすることで、建物配置の柔軟性が確保され、現在の1・2号館(ともに久米設計)、22号館(金子設計+室伏次郎)、23号館(日建設計)が建設された。また同時に耐震性強化を主目的とした既存建物の解体、減築、改修も大規模に行われ、これらに続いて2005年には24号館(久米設計)が建設された。こうして、とくに正門から東門周辺の様相は一変した。

現在は、2028年の創立100周年を目指して、「メディアテーク・キャンパス」と称した新マスタープラン(2011年策定)に基づく様々な計画が推進され、近年では新3号館(金子設計)や28・29号館(ともに鈴木信弘)が建築された。また2018年現在、30号館(ミタリ設計)、国際学生寮(オンデザインパートナーズ)が建設工事中である。

[*1] 比較的規模に近い首都圏私大の都市型キャンパスとしては、早稲田大学本部11ha、上智大学8.5ha、明治大学和泉7.5ha、立教大学7haなどがある。

[*2] これらについては『RAKU』vol.8(2012年)で詳しく紹介されている。



3号館（設計=金子設計、2014年竣工）

1

吹き抜け

3号館の1階は元の地形に合わせて高低差約1mのスロープが貫通しており、3号館正面の門から構内に入ってきた人は、そのスロープを下って3号館を通り抜け、5・6・7号館に囲まれた広場へ向かうことができる。それだけならば単なる動線空間だが、その動線の水平性に対し、吹き抜けの垂直性が組み合わされているところに、この建築固有の空間がある。

スロープに接した吹き抜けは、地下1階から4階まで約21.8mの高さを持ち、トップライトから内部に光が落ちる開放的な空間をつくり出している。さらに吹き抜けに面した柱は2.8m間隔という細かいピッチ

で置かれ、空間の垂直性を強調するとともに、スロープを行き来する運動にリズムをもたらしている。また、3階では吹き抜けのなかに浮かぶ大講義室へと渡るための橋が架かり、空間のダイナミズムを演出する一方、2～4階では吹き抜けと接する廊下を拡張して机と椅子を置き、開放的でありながら人がとどまれる落ち着いた居場所を設けている。3号館の吹き抜けは、物理的に上下階をつなぐだけでなく、空間の水平性と垂直性、動と静の関係も取りもっている。



5号館（設計=RIA、1956年竣工）

2

寸法

5号館では見付け幅300mmの細い柱と1.8mの短スパンという、RCのラーメン構造としては異例の寸法が用いられている。設計を担当したRIAの近藤正一氏は『RAKU』vol.8（2012年）のインタビューで、「その頃は細身のコンクリートというのは無上の嬉しさがあったんですよ」と述べている。スレンダーなプロポーションの柱は、古今東西を問わず好まれることは多いが、ここでは当時の時代背景が無視できない。

日本の建築界では敗戦後の1950年代から60年代にかけて、日本の伝統表現が一つの大きなテーマになっており、この建築では木造

建築の木割に基づいた寸法がデザインされている。視覚的に分かりやすい造形や素材での表現に比べ、寸法の操作はいかにも地味だろう。けれども寸法は材料の特性や建設の技術、そこでの生活様式などに深く根ざし、無意識的に身体化された伝統として、建築における意味合いは大きい。5号館では細かいピッチで立てられた柱が小規模な研究室のスケールに対応するとともに、屋根の架構には鉄骨トラスを用い、上階の広い実験室も無理なく成立させている。



7・8・9・10号館（設計=RIA、1964-65年竣工）

秩序

3

多くの建築はなんらかの幾何学的な秩序によって規定されている。グリッド状の秩序、同心円状の秩序、軸線状の秩序、らせん状の秩序といったものである。そうした秩序は一方で人間の身体と精神を拘束するものの、他方では、人間がある世界の広がりの中に存在することをその人に実感させる。

おそらく近代以降の建築で主流なのはグリッド状の秩序だろう。近代的な座標空間の形式とも合致し、RC造やS造のシステム化された建設との相性もよい。7・8・9・10号館の4棟と、それらが囲む中庭は、そうしたグリッド状の秩序が顕著な空間である。単に個々の棟がグリ

ッドに基づいているというのではなく、建設の徹底した合理化・効率化のため、中庭部分を介して4棟すべてが4.5mピッチの同一グリッド上で構想され、その秩序のなかで、大スパンの講義室や小さな研究室、演習室、学生食堂、道場など様々な場所が設計されている。この4棟からなる空間は、例えば3・5・6・7号館が囲む外部空間に比べて厳密な秩序に支配されてはいるが、ここで体験されるのは必ずしもグリッドの窮屈さばかりではなく、そこを利用する他の人々とともに安心して寄りかかれる確かな空間の骨格でもあるはずだ。



東屋（設計=鈴木勉、1983年竣工）

自然

4

横浜キャンパスで唯一木々が生き茂った場所が、正門を入ってすぐ右手にある。キャンパスの賑わいから離れて、小規模ながら自然のなかで寛ぐことができる貴重な空間だ。その中央部に建つRC造の東屋は、黄色の柱と青色の屋根という単純かつ幾何学性の強いかたちで構成され、そのいかにも人工的な有り様が周囲の自然と明快な対比をなしている。東屋は柱と屋根を切り離して見せることで、重力を無化し、屋根が浮いているような印象さえ与える。

建築とは本来、人間が自然のなかで生きていくためにつくり出した人工の環境にほかならない。その意味で建築と自然とは常に対立関

係にあり、この東屋はそのことを象徴的に示している。しかし一方で、ふつう東屋とは柱と屋根のみで成り立つ吹きさらしの建物で、自然環境のなかで建ち、その自然をよりよく体験するためのものである。この場所でも食事や読書をしたり、友人との雑談を楽しんだりする学生の姿が散見される。自然と建築は対立するものでもあり、調和するものでもある。その両義的な関係をこの東屋は体現している。



1号館（設計=久米設計、2001年竣工）

空中庭園

5

建物は高層になるにつれ、植栽などの地面と接した自然物や外部環境から離れて、無機的な空間となることが多い。それに対して屋上緑化などにより高層部に空中庭園を持ち込むことは、高層建築を自然とつなぎ合わせ、変化のある空間をつくり出す汎用性の高い手法である。

1号館では5階中央の中庭から8階の学生食堂にかけて連続的な空中庭園をつくり、外部環境を取り込んでいる。その周りは自然光に満たされ、学生や職員が集まる居場所となる。また、8階は外周部だけでなく内部の間仕切りにもガラスを採用することで、視線が多方

向に抜ける開放性の高い空間をつくり出している。キャンパス全体が高台の上にあるなかでも、1号館は比較的高層である。そのため他の棟よりも眺望が良く、横浜ランドマークタワーや横浜ベイブリッジなどがあるみなとみらい21地区を望むことも可能で、展望台として効果的に機能している。



2号館（設計=久米設計、2001年竣工）

地下

6

1号館と3号館の間に建つ2号館は、平屋のコンパクトなヴォリュームで、なおかつ外周はガラス張り、東西に細長い平面の中央部には南北に外部通路が貫通するという、著しく存在感の希薄な建築である。しかし仮にこの場所に、1号館や3号館と同様のマッシブな建物が建てられたとしたらどうだろうか。東門から8号館に至る広場的な空間の広がりや圧迫され、正門から神大橋のほうへ抜ける斜めの動線も窮屈になる。1号館脇の水辺空間も成り立たないに違いない。

2号館の主たる用途である広い演習室は、地下に埋められている。地上階はそこへ下りていくエントランスに過ぎない。一般に地下に大

空間をつくることには、施工や工費、室内環境などの面でデメリットが大きい。地上レベルの周辺環境のあり方によっては、地下化が設計の有効な手段になることもありえる。2号館における地上と地下の特異な関係は、キャンパスの全体的なデザインを前提としたなかで生まれたものである。



16号館（設計＝横文彦、1996年竣工）

シークエンス

7

小説や映画では場面の移り変わりによって、時に緩やかに、時に急激に、物語が展開していく。建築においても空間同士のシークエンス（連続）に重きをおき、動線や視線の変化、スケールや内装材の切り替えなどによって、主体の移動とともに豊かな体験をもたらそうとするつくり方がある。

16号館はそうしたシークエンスの妙を感じさせる。まず東側のエントランスホールは、全体で6mもの高低差をもつ三角形の敷地の最下部にあり、2層分の天井高をもつ。そこから北側の街路の銀杏並木に目をやりつつ階段を登ると1階ロビーに出て、西側のキャンパスから

の動線とも合流する。正面の数段上がったFIXの窓からはキャンパス内がうかがえ、それを尻目に左に180度折れ曲がって階段を登り（床材が石から木に替わっている）、今度は右に180度曲がるとまた明るいホワイエが広がる。ホワイエは左手のホールに巻き付くように弧を描き、右手には大きな開口を通して1号館前の豊富な緑。さらに進むと外部へ出て、街路へと下る階段状のテラスで一休みできる。



13号館（設計＝RIA、1967年竣工）

構造

8

1967年の竣工時、体育館上部のキャットウォークにあたる水平連続窓の箱は、巨大な壁柱の列で支持されていた。4層分にもなる高さの壁柱が短スパンで四周を囲み、建物全体の水平剛性を担うとともに、壮大なスケールの迫力ある外観をつくっていた。

一般に建築において領域を区切る部位として認識されている壁は、より明確に垂直荷重を支える部位である柱よりも、構造材としての表情が前面に出ない。したがってこの壁柱も、同じ断面積の柱で支えるよりも重力の影響を感じさせず、平たいガラスの箱が空中に浮遊しているかような印象を強めているだろう。大空間の建築は、その構造体



竣工当時の13号館（神奈川大学デジタルアーカイブ）



29号館（設計＝鈴木信弘、2015年竣工）



15号館（設計＝RIA、1980年竣工）

材料

9

建築を構成する材料は木や石や土などの自然素材に始まり、近代の産業革命以降は、鉄、コンクリート、ガラスなどの工業化された材料も多く用いられるようになった。しかし日本ではなんといっても木材が代表的な建築材料である。豊富な資源と加工の容易さ、大工技術の蓄積などによって、近代以降も住宅を中心に広く用いられてきた。耐火性や耐久性で欠点もあるが、集成材などの開発によってそれも改善しつつあり、現在も多くの建築が木造で建てられている。

国際センターとして計画された29号館も、RC造の地下階と対比的に、地上階はLVL（単板積層材）による木造で建てられた。木材を

使用することでグローバリズムの時代における「日本らしさ」を引き受けつつ、数少ない壁柱で最長10mものスパンの架構を成立させている。内部ではあえてLVLの積層面を見せることで、伝統的な真壁造りとも昨今の合板仕上げとも異なる表情を持った木質空間を生み出している。建築材料は性能的な要素、美的な要素、法的な要素、経済的な要素、文化的な要素など様々な要素からなるが、29号館はそれらの優れたバランスにおいて実現した。

記号

10

建築の仕上げ材は、それぞれの素材が直接的に与える印象だけでなく、そこに記号的な意味が重なって現れてくる。例えば木材なら、その「温かさ」や「柔らかさ」は直接的な印象だが、「日本らしさ」は記号的な意味だろう。

15号館はこうした素材の記号性が顕著な建築である。内外を特徴づけるレンガ調の打込みタイルは、西洋の組積造の建築、特に大学の施設によく用いられるゴシック様式の記号性を帯びている（その記号性は西洋の大学の起源が中世の修道院にあるという歴史に由来する）。このような仕上げ材の選択には、図書館というこの建物の文化

的な用途が影響していると考えられるが、しかし同じRIAの設計で1958年に建てられたかつての図書館（6号館）は、即物的な打ち放しコンクリートだった。ここに二つの建物の建設年代の違いを見て取ることができるだろう。15号館が建てられた1980年前後は、歴史的な形態や図像や素材が積極的に記号として扱われたポストモダンの時代である。15号館では打込みタイルの他に、エントランスのステンレスや階段室の御影石などの扱いにも、その当時の時代性がうかがえる。



正門守衛所（設計=室伏次郎、2001年竣工）



16号館（設計=横文彦、1996年竣工）

屋根

11

雨や日射から人間の生活を守る屋根。建築にとって屋根が担う機能の重要性は極めて大きい。雨の多い日本では古くから勾配屋根が発達し、その造形が建築の外観を特徴づけてきた。近代になると技術の進歩とモダニズムの構成の美学を背景に陸屋根が普及するが、それでも雨仕舞いは大きな問題であり続けている。

正門守衛所はガラスブロックのキューブの上に水平の屋根が伸びるという、幾何学性の強い構成がとられている。屋根は近くから見上げると陸屋根に見えるが、遠くから眺めると緩勾配の寄棟であることがわかる。ただ、それでも平滑に仕上げた軒天を青く塗ることで素材感

を消すなど、屋根をより面的に見せようとする設計者の意識がうかがえる。おそらく造形的・構成的な観点からは、屋根はフラットにしたかったのではないかと推測される。しかし現実の自然はそれを許さない。この理念と現実との葛藤のなかに、張りつめた緊張感のある建築の姿が見いだされていく。

窓

12

東門の向かいに建つ16号館。普通に考えれば、建物の出入口は東門からの最短距離の位置に置きそうなものだが、ここではそうなっていない。代わりにその位置には道路から1mほど上がった高さで床から天井まで届く大きな嵌め殺しの窓が設置され、キャンパスの内部が見通せるようになっている。やろうと思えばその左右の壁面もガラスにして、全面をキャンパスに向けて開放することもできたはずだろう。しかしあくまで窓として空間を限定的に切り取り、視線の広がりよりも奥行きが印象づけられている。

一般に窓は異なる二つの領域をつなぐ機能を持つが、横文彦氏の

設計による建物では、手前と奥の領域の差異を実感させるような窓がしばしば見受けられる。そしてそのような窓は往々にして、内から見たときと外から見たときとで、まったく存在感が異なる。この16号館の窓も、内外の高低差や明暗差にもよるのか、内と外とで一つの同じ窓であるとは思えないほどだ。夕刻、外部に比べて内部が明るくなったときには、逆にキャンパスの側から16号館の内部を切り取る印象深い額縁になる。



23号館（設計=日建設計、2000年竣工）

階段

13

23号館の1階、グラウンド側にある吹き抜け空間では、学生たちが頻繁に行き来する姿が見られる。その一方、たまり場としても利用されている場所が、エントランス横のこの階段である。2層分のガラスから光が照らすこの場所で、周囲の人と程よい距離感を取りながら、それぞれが自分の居場所を見いだしている。ご飯を食べていたり、読書をしていたり、グラウンドで汗を流した学生が休憩をしていたり。

ふつう階段とは上下の移動を可能にする通路として考えられているが、この階段はその機能に限らず、「とどまる」という行為を促すような、身体寸法に基づいた設計がされている。基本寸法 160 mm の高さの木

の箱を積み重ね、その段数によって人との関係が変わる。1段なら階段、2段なら椅子になり、その箱の積み重ね方によって、様々な人の行為を引き起こす。



神大橋（設計=高橋志保彦、2001年竣工）

橋

14

2001年、キャンパスを東西に二分する公道の上に、高橋志保彦教授（現・名誉教授）の設計による歩道橋が架けられた。東側の「本部地区」と西側の「グラウンド地区」とを歩道橋で結ぶことで、車通りのある公道の横断を避け、安全性と利便性の向上を図りながら、3号館から22号館へとキャンパスを貫通する緩やかな軸線が通された。

しかしこの橋は単に二つのエリアを物理的につなぐだけでなく、より観念的なレベルでも空間をつないでいる。すなわち建設当時において、すでに校舎が建て込んで容積率が限界に近かった「本部地区」と、総合グラウンドなどを含み容積率に比較的余裕があった「グラウ

ンド地区」を統合し、建築基準法に基づく一団地認定を受けることを可能にさせた。いわばこの小さな橋が、その後のより有効な土地利用や、未来のキャンパス計画への橋渡しの役割も担ったのである。



6号館（設計=RIA、1958年竣工）



竣工当時の6号館
（写真=関四郎、出典=『現代日本建築家全集11』
三一書房、1971年、p.135）

転用

6号館はキャンパス内でも大々的に、竣工後に用途が変わった建物である。一般に用途変更は、機能を満たさなくなった建物の活用、経年変化による建物の劣化の修繕、歴史的建造物等の保存を主とした建物の再生などを目的とする。しかしそれは必ずしもポジティブな変化になるとは限らず、建築をめぐる現実のままならなさを示すことも多い。

6号館はもともと図書館だったが、蔵書が許容量を超え、50周年記念事業の一環で15号館が建てられたのを機に、研究室や演習室が入る現在の用途へと変えられた。図書館の空間を特徴づけていた吹き抜けには、RIAによる神大校舎デザインの基調となっていた柱梁

15

フレームの表現が最も合理的なかたちで現れていたが、その吹き抜けも塞がれ、研究室や設備機器が増設された。しかし、時の流れのなかで建物の機能が変わっても、それを支える架構は当時のままである。4階の床面に接した小さな窓から、壁のなかに追いやられた柱梁を覗き見ることができる。新たな壁の設置によって生まれた不自然な行き止まりや必要性を失った手摺なども、かつての空間の痕跡である。



22号館（設計=金子設計+室伏次郎、2000年竣工）

内と外

建物を建てることは、必然的にある領域を内と外に分けることでもある。人間には自然や外敵から守られた内側の領域が必要である。ところがそこであまりに内と外との断絶が強くても、人間は快適ではられない。領域の分節と同時に、その適度な統合が求められる。

地上4階地下2階の22号館は、下階にスポーツセンターを含む部室棟として、学生たちの課外活動の場になっている。大学構内の建物でも、講義室や研究室にはそれなりの閉鎖性が求められるが、この22号館は学生たちの自主性を前提とし、より開放的な空間が意図されている。2~4階ではそれぞれ広々としたテラスを設けつつ、外気に

16

さらされた廊下に接して各部室が配列される。壁面およびトップライトにガラスブロックを多用し、内と外の領域を浸透させるとともに、内外を打ち放しコンクリートで統一することで、両方の空間の質を揃えている。



総合グラウンド・テニスコート

地形

17

キャンパスの南西部、L字型の総合グラウンドは、人工的につくられた段状の地形の最下段に位置している。そのグラウンドの南側、約5m上がったところに7面のテニスコートが設置され、さらに約6m上に外部の住宅地が広がり、擁壁に沿って住宅が軒を連ねている。土地の変遷をたどると、かつては南側の住宅地からキャンパスまで連続した傾斜地になっていた。しかしグラウンドを整備するため、その土地は切り崩され、大規模な造成がなされた。

起伏の多い横浜キャンパスでは、3号館や16号館に代表されるように、多くの建物が細かい地形の変化に対応しながら建てられ、それ

が一つの空間的な魅力を生んでいる。それに対してこのグラウンドでは、あまりに暴力的に地形が改変され、その切断面は有無を言わずコンクリートの擁壁で固められている。こうした所業を批判することはたやすいが、しかしそもそも人間が場所をつくるという行為には、多かれ少なかれこのような暴力性が含まれるのではないか。そんなことも考えさせられる圧倒的な光景だ。



24号館（設計=久米設計、2005年竣工）

街並み

18

とりわけ建て込んだ都市のなかに建築を計画する場合、周囲に建つ建物のヴォリュームや形態、素材や色調など、周辺環境の様々な要素を考慮する必要がある。大学の施設であっても、現代の都市型キャンパスでは、限られた敷地条件において校舎がキャンパスの門の外に建設されることは頻繁に起こりうるため、街並みへの配慮もそれだけ重要視される。

正門の向かいに建つ24号館では、エントランス部分をセットバックさせ、大きな庇空間を設けている。この庇は単に雨や日差しを避けるためだけでなく、大学と住宅地という二つの領域の境界を調整す

る役割も持っているだろう。また、24号館の外観に見られるシンプルな壁面とガラスの構成、1階エントランス部分と外構の舗装材の選択は、斜向かいに建つ16号館と調子を合わせているように見える。こうした街並みへの慎重な配慮は、社会において「開かれた大学」というイメージが求められる時代の影響もあるかもしれない。



8号館（設計=RIA、1964年竣工）

装飾

19

かつて絵画や彫刻などの芸術作品は、それらを内包する建築と一体となり、全体で一つのコスモロジーを形成していた。しかし時代が下るにつれ、各作品がそれぞれの自律性を増して建築から離れていくとともに、建築のほうでも機能性や経済性が重視され、空間を彩る装飾的要素は徐々に排されていった。そんななか戦後の日本では、イサム・ノグチや岡本太郎、猪熊弦一郎といった芸術家が建築家とコラボレーションし、建築と芸術が融合した空間がつけられた。

8号館2階の「マップホール」でも、吹き抜けの壁一面に、13色のガラスモザイクによる世界地図（高さ6.2m×幅13m）が描かれて

いる。この壁画は、これを見た学生たちに雄大な心を持つてほしいという大学創設者の米田吉盛先生の意向によるもので、8号館の設計も壁画の設置を前提として進められた。RIAの即物的な建築のなかで壁画の装飾性が際立つ、建学の精神を象徴する空間といえる。



5・6・7号館（設計=RIA、1956/58/64年竣工）

ストリート

20

あらゆる都市は、計画された側面と自然発生的な側面とが時間を媒介しながら複雑に交差して成り立っている。ある広がりを持った敷地のなかで、その時々に応じて様々な用途の建物が建ち、様々な属性の人々が行き来する大学のキャンパスは、そのような都市の縮図として見る事ができるだろう。

現在に至る横浜キャンパスの空間の起点は、1954年にRIAによって提出された「神奈川大学総合計画案」にある（『RAKU』vol.8参照）。その案では、それまで自然発生的に建てられていた小規模な校舎を整理し、基本的に東西に伸びる校舎群を配してキャンパスの骨

格がつけられている。こうした骨格は1964年時点の計画案にも見て取れるが、それから半世紀が過ぎ、本館や3号館も建て替えられ、キャンパスは大きく様変わりした。そのなかで当初のマスタープランの骨格を今に残すのが、5・6・7号館に囲まれた東西に細長い外部空間である。はたして山口文象ら初期RIAのメンバーが今日のキャンパスの姿を想像していたかは分からない。しかし東側の3号館から西側の神大橋へ抜けていくこの空間は、キャンパス内の都市的なストリートとして活気に溢れている。

1964年時の計画案
（出典=『RAKU』vol.8、2012年、p.6）

キャンパス建築ガイド



1号館 (2001年)

設計=久米設計

横浜キャンパスの本館。正面性が強い直方体の外形。地下1階地上8階で、1階は事務の窓口が置かれ、吹き抜けで2階と連続する。5階中央には上部が開放された中庭、8階の食堂からはみなとみらいの景色も望める。同時に計画された北側の2号館との間は、ガラス張りの低層棟と池で場がつくられた。



2号館 (2001年)

設計=久米設計

地下に演習室の大きな空間が広がる一方、地上階は階段室と円筒状のエレベーターが設置された、地下に下りるためだけの動線空間。ボリュームを抑えたガラス張りの平屋で、細長い平面形が東西の軸線を強調しつつ、中央部分の抜けによって南北の動線も確保。地下演習室では音響に配慮した折板状の天井が目まぐるしく。



3号館 (2014年)

設計=金子設計(横浜市建築設計協同組合)

東側、駅からのアクセス方向に正面を向けて建つ。地下2階地上4階。1階は地形にならって東から西へと下るスロープが通り、キャンパスの奥へと抜ける動線にもなっている。垂直方向も大きなアトリウムを介して各層が繋がる。トップライトからの光、細身の柱とプレースの反復が、軽快な空間の印象をもたらす。



9号館 (1964年)

設計=RIA

中廊下型の講義棟。廊下に面した高窓はすべて下端を床から1600mmの高さに設置することで、室内に対しては廊下を歩く人の気配を遮りつつ、採光と通風を可能にしている。7・8・9号館の立面は、当初の設計では窓の中間部に取り付けたルーバーで水平性が強調され、柱型の垂直性と対比されていた。



10号館 (1965年)

設計=RIA

東側の中庭に面した2~3階に、地域住民にも開かれた学生食堂(2009年にリニューアル)。2階の天井高を高くとって吹き抜けとし、そこをガラス越しに3階から囲んで見下ろすような構成。4階はキャンパス内で2室しかない大階段教室。主構造はRC造だが、屋根は鉄骨造とし、大スパンの教室を覆う。



11号館 (1967年)

設計=RIA

元は短期大学(2002年廃止)の校舎。北側の1号館とは公道および高い塀で隔てられ、敷地は独立している。7・8・9号館と同様、RCのラーメン構造で、外部に柱型を露出させるデザイン。南側は強い日差しに対応し、曇りガラスの二重窓になっている。1~3階は片廊下型、4階は中廊下型という構成。



12号館 (1968年)

設計=RIA

建築学科の構造系の研究室が並ぶ中央に3層吹き抜けの大空間があり、耐震実験など大規模な構造実験が行われる。研究室も7・8・9号館などと比べて天井が高い。神大橋からのアクセスはあるものの、隣接する15・17・21号館との関係は薄く、独立した配置で、外部の学生が建物に入る機会はほとんどない。



5号館 (1956年)

設計=RIA

一見地味な低層の研究室棟だが、RCの躯体に特徴がある。一般にRC造のスパンは4~6mだが、ここでは木造の在来工法と同等の約1.8mと極端に小さく、柱も細い。その柱と窓の繰り返リズムが、正面の広場に対して小気味よい表情をつくっている。エントランスの外階段は建物と縁を切られ、片持ちで自立。



6号館 (1958年)

設計=RIA

もともと2層の吹き抜けが特徴の図書館だったが、現在は演習室や研究室に用途を変更、吹き抜けも塞がれた。地下1階と1階の2層分が書庫として設計され、エントランスは2階。東側の3号館から続く軸線を、建物正面の独立した大階段が受けとめる。当初は矩形平面だったが、後年RIAの設計で西側に増築。



7号館 (1964年)

設計=RIA

8・9・10号館と同時期に建てられ、4棟が連結しながら中庭を構成する(いずれも1階は半地下で、ドライエリアを持つ)。開学当初の学生数の急増に対応するため、柱位置を4棟全体で同じ4.5mのグリッド上に定めるなど、建設の効率化を徹底。8・9号館と共に6階建て、1スパン13.5mの門型フレームの反復。



8号館 (1964年)

設計=RIA

東門からの軸線上に建ち、屋上の時計台がキャンパスのシンボルとなる。1~3階が講義室、4~6階が工学研究棟だが、7・9号館と繋がっているため、様々な学科の学生が頻りに廊下を通る。2階のエントランス横、2層分の壁面一杯に世界地図が描かれた「マップホール」は建物のもう一つのシンボル。



13号館 (1967年)

設計=RIA

トラス構造の体育館。かつては入学式などの式典にも使われた。上部の通路と一体化した帯状のハイサイドライトが、それを支える巨大な壁柱の列とともに、外観を特徴づけている(当時RIAで構造を担当した山家啓助氏は山家京子教授のお父上)。現在は耐震補強用の控え壁と鉄骨のフレームが外部を囲う。



14号館 (1980年)

設計=RIA

11号館の裏手に建つ、腰折れ屋根が特徴的な建物。RC造3階建てで比較的閉鎖性が高く、1階と3階に心理相談センターが設置されている。学生が入館できるのは午前中のみで、午後は近隣住民を受け入れる。2階には人間科学研究科の研究室があるが、出入口も異なり、内部では分離して使用されている。



15号館 (1980年)

設計=RIA

6号館に代わる現在の図書館。外装と1階内部は街路から連続してレンガ調(打込みタイル)。図書館という用途も考慮してか、初期のRIAの即物的な建築に比べ、素材やディテールが多様で装飾性が高く、空間構成も演化的。上階に行くにしたがい落ち着いた雰囲気となるよう、内装や照明に変化をつけている。



16号館 (1996年)

設計=横文彦

452席の「セレストホール」を中心とする、比較的公共性の高い建物。東門を入る手前に位置し、大学の顔ともなる。周囲を道路に囲まれた三角形の傾斜地で、各面の環境の違いに対応しつつ、6mもの高低差を取り込みながら、エントランス、ロビー、ホワイエ、テラスといった空間を大らかに繋いでいる。



17号館 (1982年)

設計=RIA

特定の正面を持たない、ロの字型平面の建物。中央のヴォイドは中庭として利用されるのではなく、1階部分にガラスのヴォールト屋根が架かるプールを配置、上4層分の研究室等がその屋根を見下ろす。下階と上階とでまったく異なる用途の空間が、全体性の強いロの字型の構成で一つの建築に統合されている。



18号館 (1988年)

設計=RIA

キャンパスの外、東門の前の角地に建つ。SRC造。1~2階の就職課は企業の担当者など外部からの訪問客も多い。地下1階に施設課と史料編纂室。南側・西側の壁面を窪ませたような窓は17・20号館と同形式だが、ここではそれぞれの窪みに薄い庇が架かる。道路との間のドライエリアが地下階に光を落とす。



19号館 (1994年)

設計=RIA

坂道に沿って東西に伸びる、地下1階地上3階の建物。基本的に外部の住宅地に接する北側は閉ざし、南側のキャンパスに向けて開かれる。内部には生協購買部や学生食堂、保健管理センターなど。2階では東端部の外階段の踊り場を広くとり、中央部に花壇を配置。トップライトで光を落とし、休憩スペースとする。



20号館 (1988年)

設計=RIA

シンプルなか廊下型の語学演習棟。南北に伸びる横長のプロポーションの建物だが、中央部にガラスブロックの壁面で採光する休憩スペースを設けることで、長い中廊下を分節する。外国語学科の研究室が並ぶ4階のみ、2本の中廊下が通る変則的な平面。建物の背後、約2層分の高さの擁壁とは梁で一体化される。



25号館 (1994年)

設計=中野建築事務

11号館の西側に建っていた鉄骨造建築を大学が買い取ったもの。1階が産官学連携推進室、上階が人間科学科の研究室として使われる。もともとそれほど大きくない建物だが、住宅地との境界に接する南東面は、三角形の敷地形状と細い道路のスケールに合わせて、壁面が90度に細かく折れながら連続する。



26号館 (2008年)

設計=佐々木郁

グラウンドと擁壁の間に位置し、倉庫や野球部の部室として使われる小規模な平屋の建物。外階段で上がる屋上はゴルフ練習場、建物の裏手は野球のブルペンとして活用。キャンパス計画の周縁で間に合わせのようにして建てられた飾り気のない建物だが、様々な条件に対応した有機的な場を形成している。



27号館 (2009/2011年)

設計=神奈川大学(A棟/改修)+大和リース(B・C棟)

キャンパスの中心部からやや離れた住宅地のなかに位置し、A・B・Cの低層3棟からなる。A棟は2009年にNTTの社宅を大学が買い取ったもの(写真右)。施設課が内装の改修をし、現在は生涯学習棟として使われている。B・C棟は3・4号館の建て替えに際して建てられた仮設建築で、現在は倉庫として使用。



28号館 (2014年)

設計=鈴木信弘

キャンパスの外周部に建つ、地上2階地下1階の木造建築。坂道に沿った東西に細長い建物で、坂下の東側と坂上の西側とでほぼ1層分の高低差がある。中央付近に2層分のテラスを設けることで、東西のボリュームを分節しつつ、南側のキャンパスと北側の住宅地との関係を取りもつ。設計者の鈴木氏は本学卒業生。



21号館 (1984年)

設計=前田建設工業

ALCパネルを用いた乾式の鉄骨造4階建て。1階にはファーストフード店が入り、昼時には近隣住民も含めて多くの人で賑わう。上階はリースペースや研究機関が配され、外階段から直接アクセスが可能。外部階段が3ヶ所設置されているが、頻繁に利用されてはいない。隣接する18号館とともに改築予定。



22号館 (2000年)

設計=金子設計+室伏次郎

地下2階地上4階。打ち放しコンクリートとガラスブロックの組み合わせを基調とする。下階のスポーツセンターは半地下ながら2層の吹き抜けと南北の大きな開口、ガラスブロックのトップライトによって明るい。上階は積極的に外気を取り込みつつ部室群を配置。段状になった北側の広いテラスからの眺望も魅力。



23号館 (2000年)

設計=日建設計

キャンパス内唯一の免振構造建築。外観は配管を隠す役割を担ったパンチングメタルの列が特徴的。1階のエントランスホールでは、吹き抜けの空間の隅に木製の段状の場所を設置。2階への動線になるとともに、座って留まる居場所にもなる。その他のディテールなどにも大手設計事務所らしい工夫が多い。



24号館 (2005年)

設計=久米設計

正門の向かいに建つ法科大学院棟。道路からセットバックしたエントランスに大きな庇を設け、斜向かいの16号館と素材を揃えるなど、既存の周辺環境への意識の高さを感じさせる。吹き抜けのエントランスホールは、主たる採光源であるトップライトからの光が打ち放しコンクリートの壁を照らす静寂な空間。



29号館 (2015年)

設計=鈴木信弘

下階がRC、上階が木の混構造。「日本らしい国際センター」が求められるなか、上階はLVL(単板積層材)を壁柱と梁に用い、その積層した木の表情を積極的に内部に露出。縦格子状にLVLを組み合わせた非耐力壁と合わせ、新鮮な木質の空間がつけられた。ワンルーム的な平面のなかに、2層分の中庭を二つ持つ。



正門守衛所 (2001年)

設計=室伏次郎

ガラスブロックのキューブの上で薄い寄棟の屋根が水平に伸びるという幾何学的な構成。夜間に照明が灯る守衛室はそれ自体が発光体となる。片側で屋根を支える柱はL字型のアンクルを4つ束ねたもので、即物的かつ軽快な印象。東門脇、より純粋な屋根と柱のみの東屋も、同じく室伏名誉教授の設計による。

私たちのキャンパスの建築

特集後記

はじめはキャンパスの建築を個別に紹介するという企画が立てられたが、日頃自分たちが使っているキャンパスだけに、現実の主體的な体験を重視し、キャンパスをシーンごとに建築的視点で捉えていくことになった。ひとつの建物につき担当の学生を一人決め、まずはシーンにこだわらず、なるべく多くの建物を分析していった。学生間での議論に基づくシーン&キーワードの抽出では、普段何げなく使っている大学の校舎を多角的な視点で捉え直すことになり、建築の新しい見方が得られた。それは面白く、意義のある作業だった。各シーンに対するテキストの執筆過程では、編集の長島さんや先生方のご指摘をいただきながら、校正と書き直しを何度も繰り返し、文章の内容やキーワードの妥当性などを検討していった。その後、qpさんと長島さんがテキストの内容を踏まえて各シーンの写真を撮影された。それは必ずしもテキストを説明するだけの写真ではなく、誌面のなかでテキストと等価に響き合うようなものとして撮られている。

全ての作業を終え、学生たちの意図するレベルと先生方の求めるレベルの差異に対する葛藤が強く残っている。しかし、短い期間ながらも多くの人の力が結実して完成した冊子を手

に、キャンパスの各シーンを見て回ってもらえれば幸いである。

(木村捷希+丹羽貴行+早川洋史+岡本晴美／特集担当)

今回の特集テーマは、本学の横浜キャンパスに建つ建築を見つめ直すこと。「施設」としてではなく「建築」として捉え、その歴史的な背景や変遷を理解し、そこに在る空間を学生達が「テキスト」によって表現することに挑戦している。そして、その積み重ねられたテキストを通して新しい(もしくは埋もれていた)コンテキストを見出すような作業だったようにも思う。

考古学には、古代を理解するために、当時を類推し、あり得る技術や知恵を利用して再現する実験考古学というアプローチが存在する。どうやってそれを成し遂げたのか、どのような工夫が積み重ねられ、どのように技術を生み出してきたのか、その瞬間の積み重ねを再現することによって今日に続く人類の軌跡を理解する。スケールの違いはあるが、今回の特集における一連の作業は、そのようなアプローチに似ている、と作業の中で感じた。キャンパス建築の生まれる背景や経緯、あるいはその当時の社会状況に思いを巡らし、そこから生まれた計画を読み解き、そして今をシーンとして切り取る。本学の建築には読み込むと新しい魅力を感じさせてくれるものがあり、また、今の価値観や今の技術との対比によって色濃くその建築の特徴が現れているものもあった。

一方で、今回取り上げた建築の中で近年に建てられたものは、あまりに近くて当時と表現できる歴史は無いためか、十分にプレゼンスできていない。今を記述する言語があまりに不確実な点は課題でもあった。

ただ、私としては改めて建築の奥深さを知った気がした。本学にある建築は、一見して華々しいものではないが、その歴史に触れ、今をじっくり眺めてみたとき、特徴的な建築表現が見え隠れするからだ。

(上野正也／助教)

特集文章クレジット

執筆=木村捷希・丹羽貴行・早川洋史・岡本晴美・森島駿平・田村駿介・印東尚朗・城間リカド・藤原陽平・須山高志・櫻井浩平・東田萌・市川貴一・下山智加・金井賢三
監修=長島明夫

特集写真クレジット

長島明夫 特集扉、シーン1、2、5、7、8、9、12、15大、16、18
qp シーン3、4、6、10、11、13、14、15小、17、19、20
木村捷希+早川洋史 キャンパス建築ガイド(29点)

修士論文

稲岡寛之

大岡晃

西蔵祥大

遊佐舜

● 優秀賞



稲岡 寛之
Hiroyuki INAOKA

曾我部研究室
SOGABE lab.

参道の編集 Edit of Approach

墨田区業平・横川地区を対象とした
文化的発展のためのプラットフォームの構築
Construction of a platform for cultural development
which targeted Sumida-ku Kashiraira and Yokogawa

石田 ストーリーは分かりました。元々の押上神社の伽藍配置や氏子のプランニングがどのように表現されているのか、平面のエリア等を説明してください。

稲岡 古い資料が残っておらず、詳しい計画は分かかっておりません。

石田 既存のものは無く、提案したものの自体は全て新しく計画しているのですか？

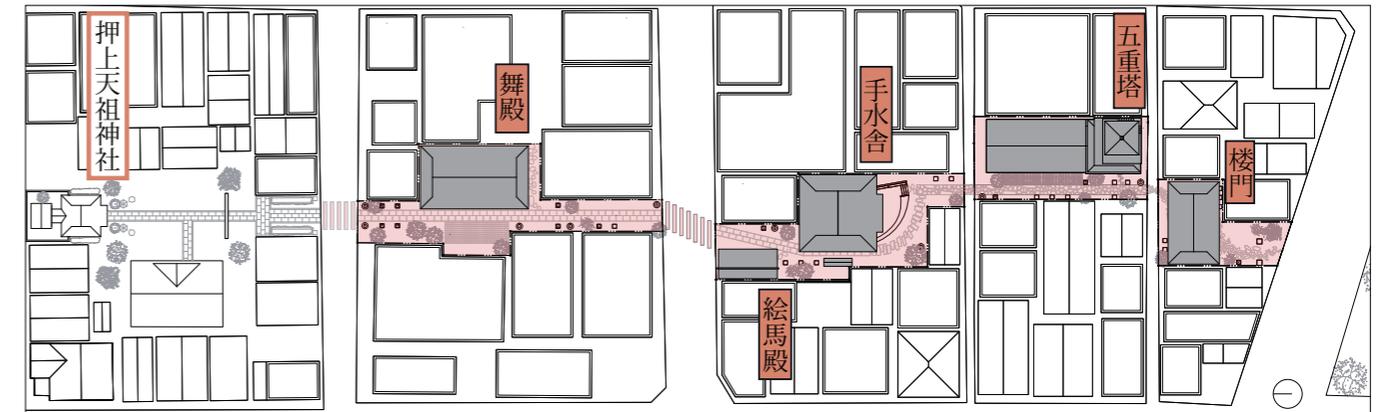
稲岡 本殿しか残っていません。実際、この神社が再建されたのが昭和5年となっていて、敷地がとても狭いということで、最初に建てられたのは、本殿と舞殿しかありません。

石田 氏子の推移はどのようになっていますか？

稲岡 この地区は、どんどん新しい住人が移住しており、そのような経緯から氏子の数としてはあまり変動がありません。

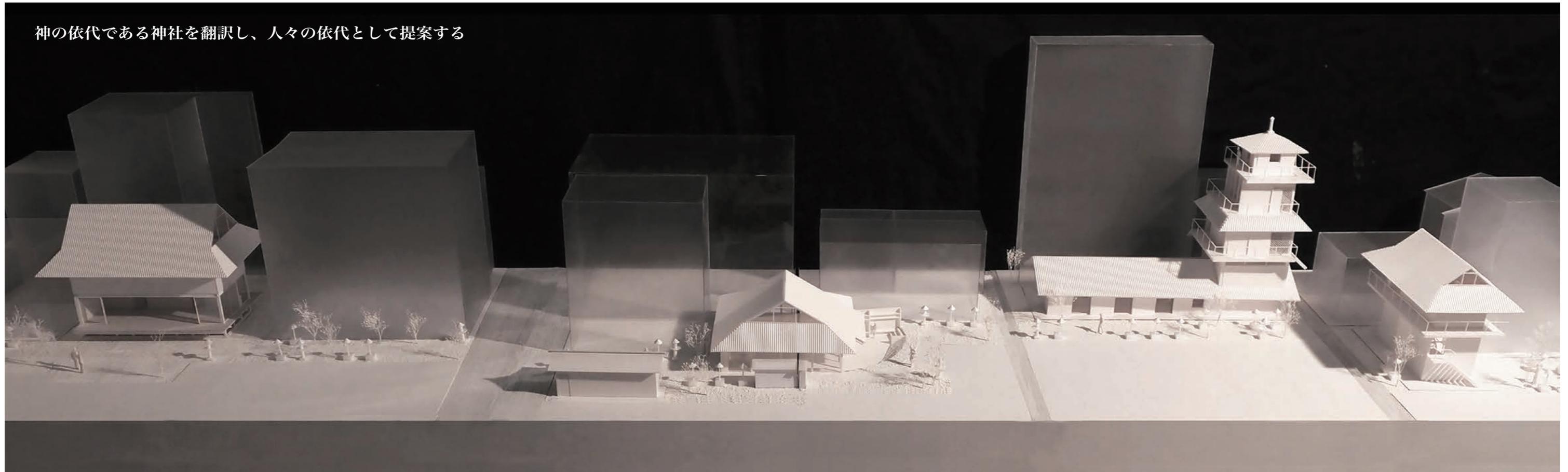
内田 このデザインと他で使っているデザインの関係性はどのようになっているのですか？

稲岡 そのデザインの関係性としては、拝殿の屋根が瓦でできているということからそれを統一に作るということと、本殿が現代的なガラス張りであるということから、現代と伝統の特徴を兼ね備えているため、それらの様子を統一してかぶせると言うところにあります。



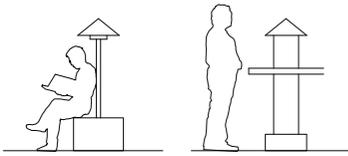
全体配置図

神の依代である神社を翻訳し、人々の依代として提案する



椅子灯籠、机灯籠

人の通り所である灯籠を参道に設ける。



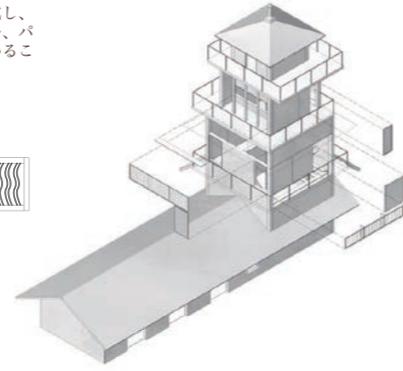
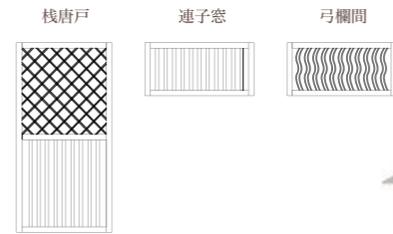
狛犬

外構にリードフックを設置する。
散歩に訪れた犬が神社を守る狛犬となる。



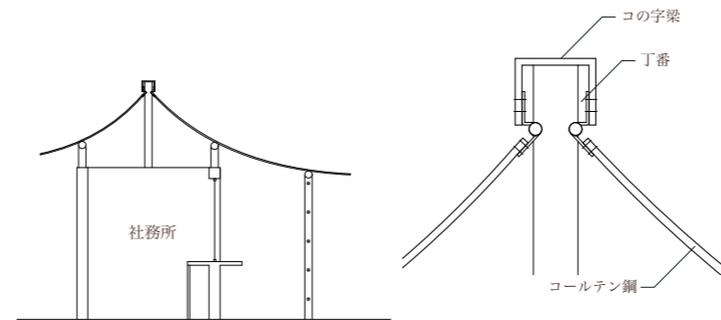
構成材の読み替え

本計画では柵板や椅子を立面に現れるように構成し、開口部は現代的な素材であるエキスパンドメタル、パンチングメタル、波板、ポリカーボネートを用いることで伝統的なデザインを翻訳している。



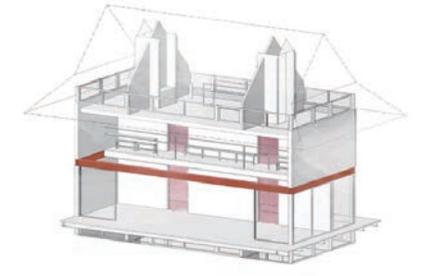
絵馬殿詳細図

コの字梁から丁番でコールテン鋼の屋根を吊る。
梁と鋼板の間の隙間から自然換気を促す。



ハレの舞台 - 紅白 -

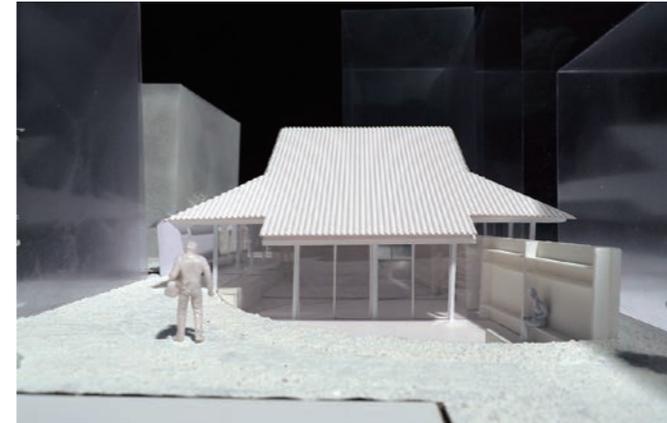
墨田区の産業の始まりを支えたものには染色もあげられる。また墨田区の木に「桜」が選定されていることから、カーテンを桜で染色する。舞殿中央にある3枚の白い壁とその間に貼られた桜色のカーテンによって、ハレの舞台に相応しい紅白を表現する。



楼門



五重の塔



手水舎



絵馬殿



楼門の立面



五重塔の断面



手水舎の断面



舞殿

●優秀賞



大岡 晃
Akira OOKA

山家研究室
YAMAGA lab.

交信する建築

The architecture inheriting mutual communication

2つの佃の記憶を引き継ぐ学習センターの提案

A propose for learning centers to inherit the memory of two Tsukuda

石田 具体的に二つの建築を見みるとシステムが同じように見えますが作り方に違いはありますか？

大岡 作り方の違いはヴォリュームの入れ方を変えていることです。大阪の方はグリッドに対して水平方向に直角に空間を作っています。それに対して東京の方は構造体に対して45度曲げて空間を構成しています。

内田 デザインがとても個人的で私が持っている佃のイメージとはかけ離れてたものだと感じます。具体的にこれを基にしてここで何を伝えたいのかわからないです。佃に対してあなたはどのような風にイメージを持っていますか？

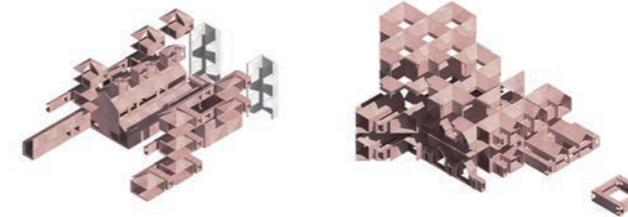
大岡 現代の佃は、1960年代から70年代の経済成長から高層マンションが計画されており、古い街並みを残した部分は都市の中に内包されていて、都市空間

の中で取り残されているものに見えます。その中で場所の記憶というものが徐々に高層化や、工業化により忘れ去られていると私はとらえました。何か建築で場所の記憶や形といったものを残していける建築を考えられないかと思いこの形態でこのようなストラクチャーをもちながら計画しました。

曾我部 それぞれの佃の様子をリサーチし、他の都市の様子とは違う様子が描かれています。リサーチの結果を形態に変換されたものが必ずしも佃ではなく、いろんな都市空間の中に存在しているので佃にしかないというものが一定量あると説明できたと思います。

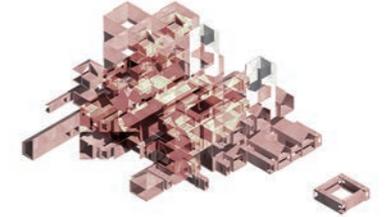
大岡 土地の調査から変換する時に機械的な形に自分の中では変換してしまいましたが、その家並みや空間といったものは佃にあるので計画したつもりです。

交信する建築とは



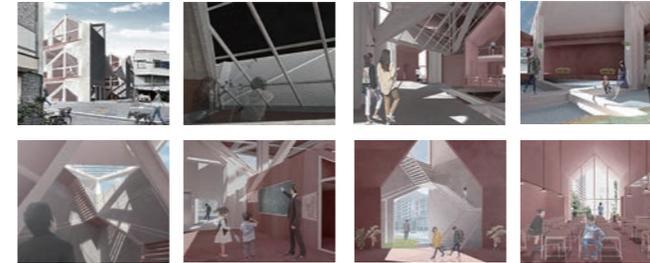
マチに場所の記憶を引き継ぐ建築を”交信する建築”と言う。都市・建築同士が呼応し合う時に建築が交信する。呼応し合う時が訪れるのは、片方の都市を離れ他方の都市を訪れた時である。また、都市に自然災害が起きて移転や疎開をしなければならなくなった時である。

交信する建築の空間の移し



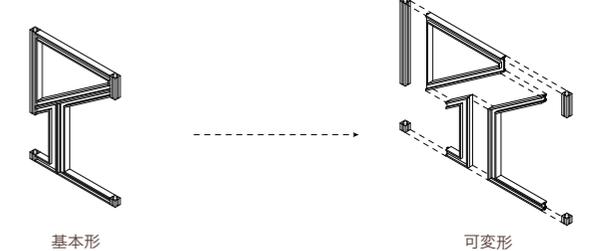
過去に起きた自然災害を踏まえて、場所の記憶を建築でどのように引き継いでいくことができるのかを考えた。片方の空間を他方の建築に付け加えることで場所は違えど都市空間や建築で過ごした過去の記憶が引き継がれていくのではないかと考えた。

交信する建築の空間の引き継ぎ



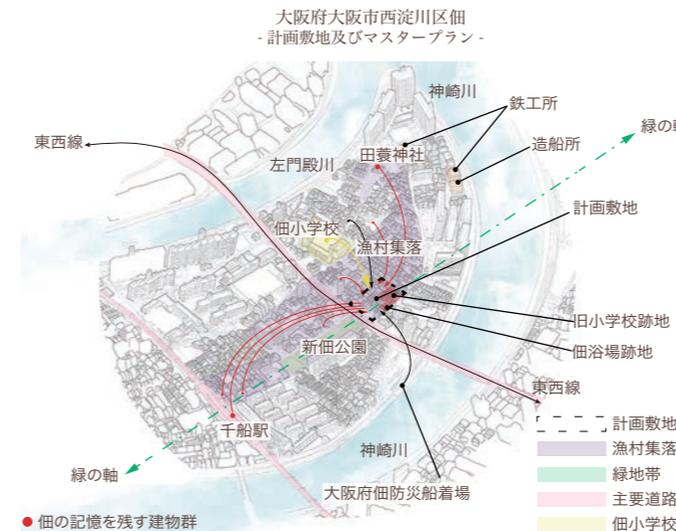
それぞれの建築で体感した空間が組み替えられることで失ってしまった場所の記憶を建築が引き継ぐことを可能とする。そうすることで少しでも街の記憶を残し、来世に引き継ぐことで土地の記憶だけでなく建築で引き継いでいくことができると佃の記憶を継続して残すことができるのではないかと考える。

構造とユニット



鉄骨ラーメン構造を基本とする。3つのパーツから成り、組み合わせることで可変性を生む。構造体に沿ってユニットを組み込むこととユニットの組み込み方を45度変えて組み込むことで微妙なスケール感の違いを生み出す。ユニット化された空間の挿入により二層空間を実現している。

2つの佃の記憶を引き継ぐ 400年 東西学習センターの提案



大阪府大阪市西淀川区佃の学習センター



公園から見た学習センター



よりしろのある通路空間



船の展示室

東京都中央区佃の学習センター



月島の軸が通る道から見た学習センター



開かれたアトリウム空間



図書スペースから見たテラス

優秀賞



西蔵 祥大
Shota NISHIKURA

曾我部研究室
SOGABE lab.

横浜市盲特別支援学校の
通学路計画

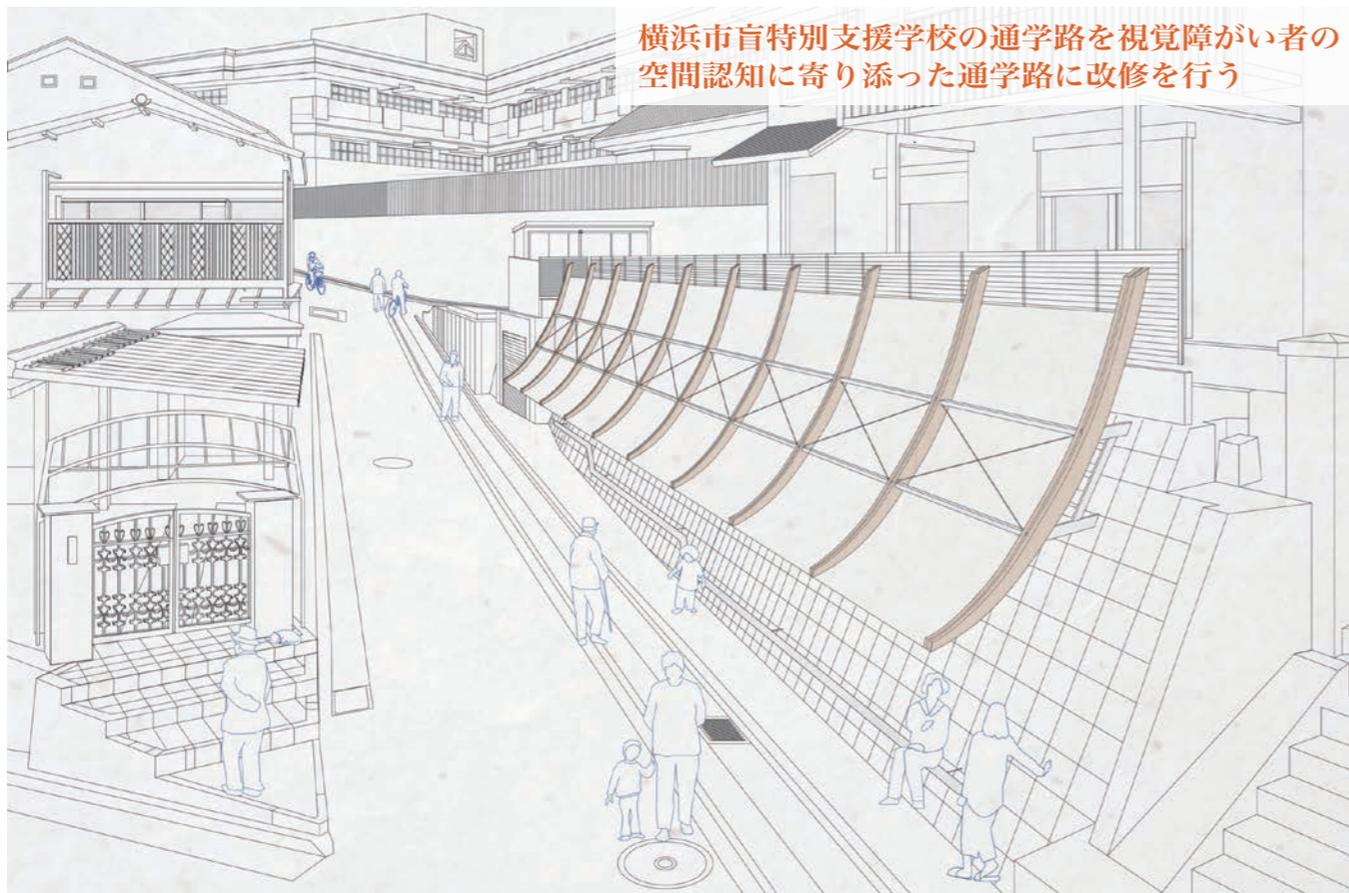
Project for school route of yokohama
municipal blind special support school

山家 すごく力作だと思います。視覚障害のある方は、身近なものを手掛かりにしています。実際にそう言ったことを取り入れていくと、聴覚であったり、点字ブロックの間隔であったりに、集約されていくのでしょうか。

西蔵 そうではありません。匂いなども流れて行ってしまいますが、手掛かりになっています。調査中に知ったことで、面白かった事は、電信柱の数で曲がり角を見つけるなど、既存の環境を全く違った捉え方をしている事です。私たちが知らないことが多くあると感じました。

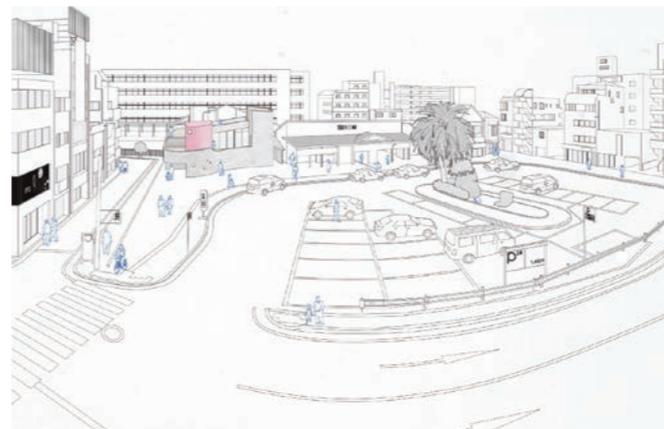
内田 面白いと思います。この模型の中で、計画のある場所と、ないところがありますが、どのように限定しているのですか。そこをもう少し説明して欲しいです。

西蔵 例えば、ここは何も計画されていない場所です。ここは車が通っていることが、視覚障害者にとって、手掛かりになっています。逆に、止まっている車の方が怖かったりします。そのような場所についても、ヒアリングを行いました。問題点が見つからなかったです。



横浜市盲特別支援学校の通学路を視覚障がい者の空間認知に寄り添った通学路に改修を行う

琴の休憩所



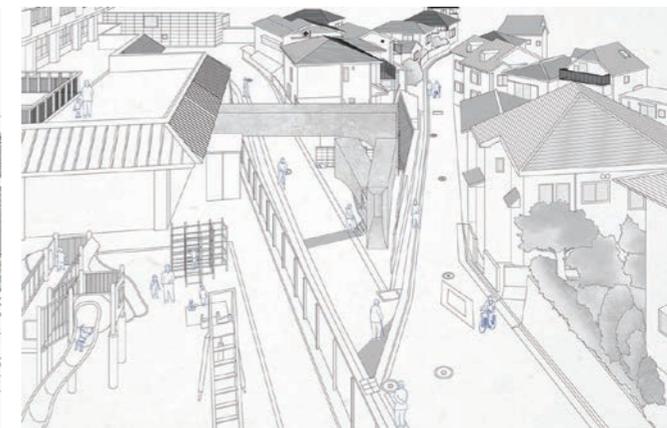
壁の学校



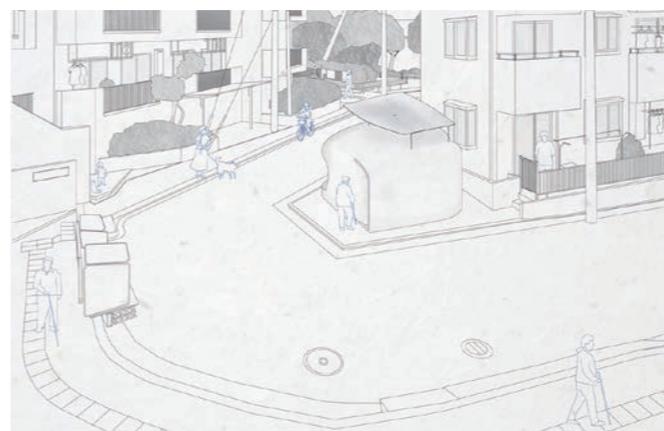
感触の散歩道



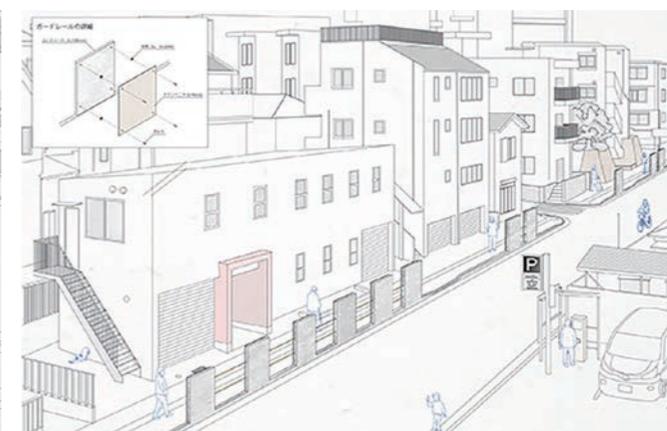
木の遊歩道



風の通路



水の休憩所



間隔の遊歩道

【調査方法について】



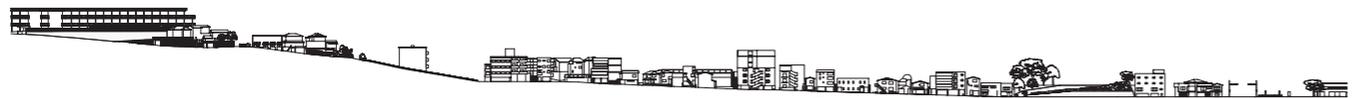
本計画では視覚障がい者の空間把握の特性や探索行動を明らかにするために歩行経路実験を行い、そこから横浜市盲特別支援学校の通学路上に7種類の様相フレームを抽出した。提案ではその様相フレーム内の特徴的な環境を増幅・変換する装置としての建築を通学路上に配置していくことで、視覚障がい者の空間認知に寄り添った新たな通学路を提案する。



【調査対象者について】

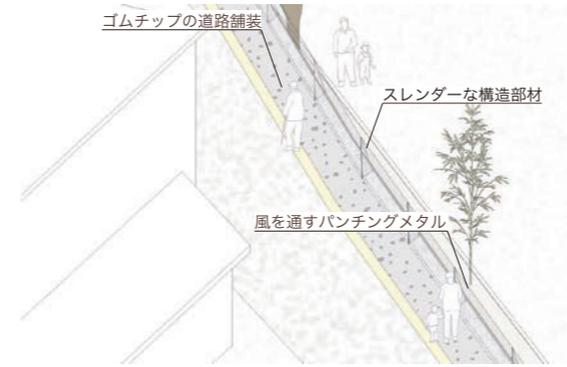
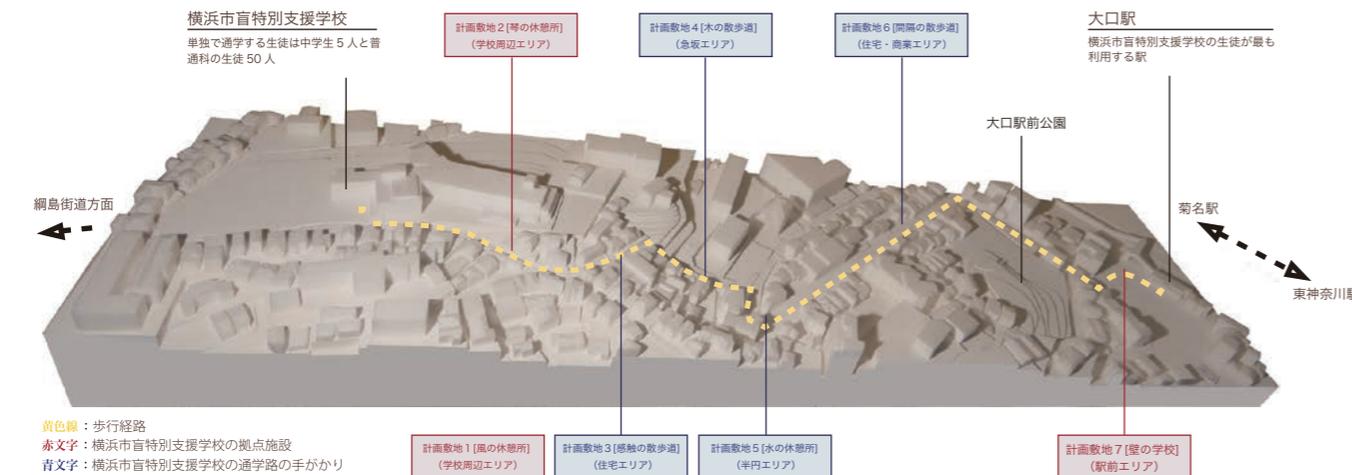
調査対象者	Cさん
年齢	50歳
性別	男
原因	網膜色素変性症
視覚経験	35歳から全盲になり白杖を利用している。
白杖の利用	あり
通学状況	単独

①学校周辺エリア ②住宅エリア ③急坂エリア ④半円エリア ⑤住宅・商業エリア ⑥車道沿いエリア ⑦駅前エリア

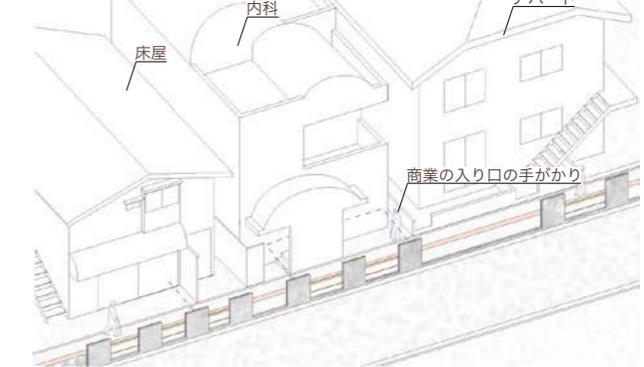


<p>①学校周辺エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 正面や後ろから風が吹く 傾斜の緩急がある 人通りが多い 小さな空地が2つある 	<p>②住宅エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 道幅が狭い 道が折れ曲がっている 人通りが多い 傾斜の緩急がある 	<p>③急坂エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 道幅が狭い 傾斜の急な坂になっている 風が横から吹く 	<p>④半円エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 公園から子供の声が聞こえる 道をカーブしている 緩やかな傾斜がある 	<p>⑤住宅・商業エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 長い距離をまっすぐ歩く 商業施設と住宅が混在している 緩やかな傾斜がある 	<p>⑥車道沿いエリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 道幅が狭い 大口駅前公園がある 交通量の多い場所 人通りが多い 	<p>⑦大口駅前エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> 音響信号や駅の音が聞こえる 人通りが多い 道がカーブしたロータリー
---	---	--	---	---	--	---

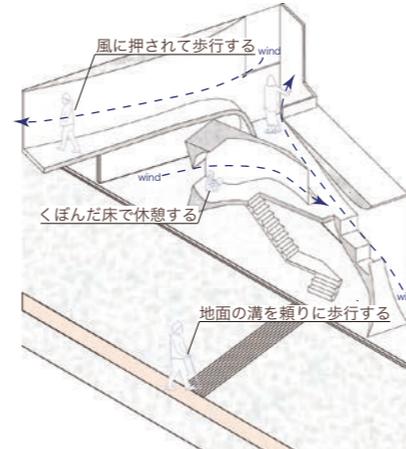
【マスタープラン】



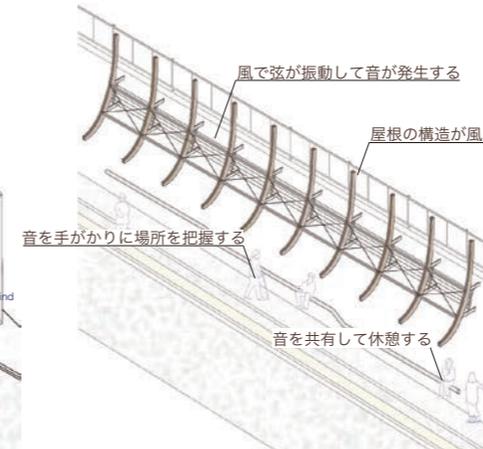
木の散歩道



間隔の散歩道



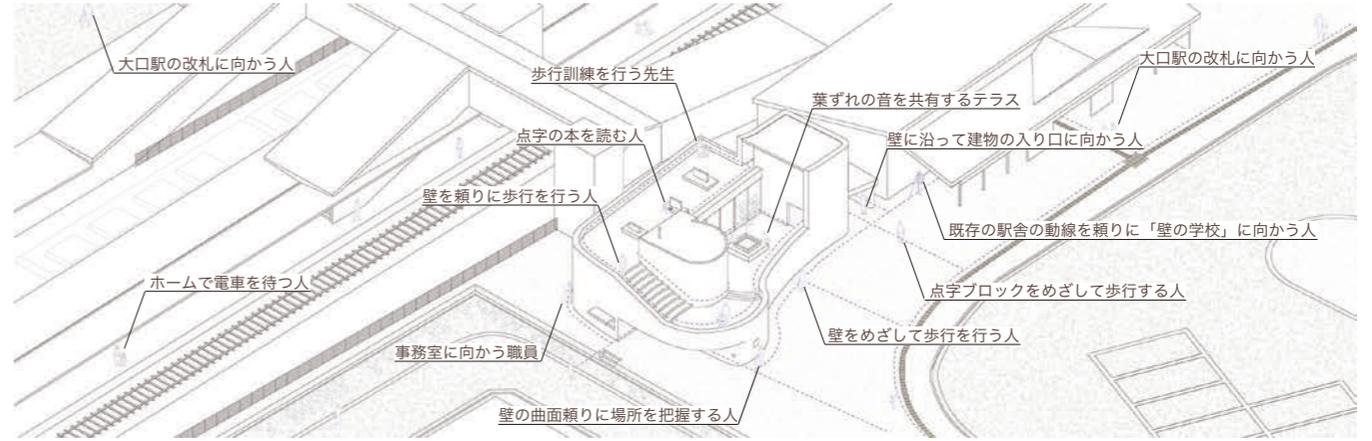
風の通路



琴の休憩所



水の休憩所



壁の学校

●優秀賞

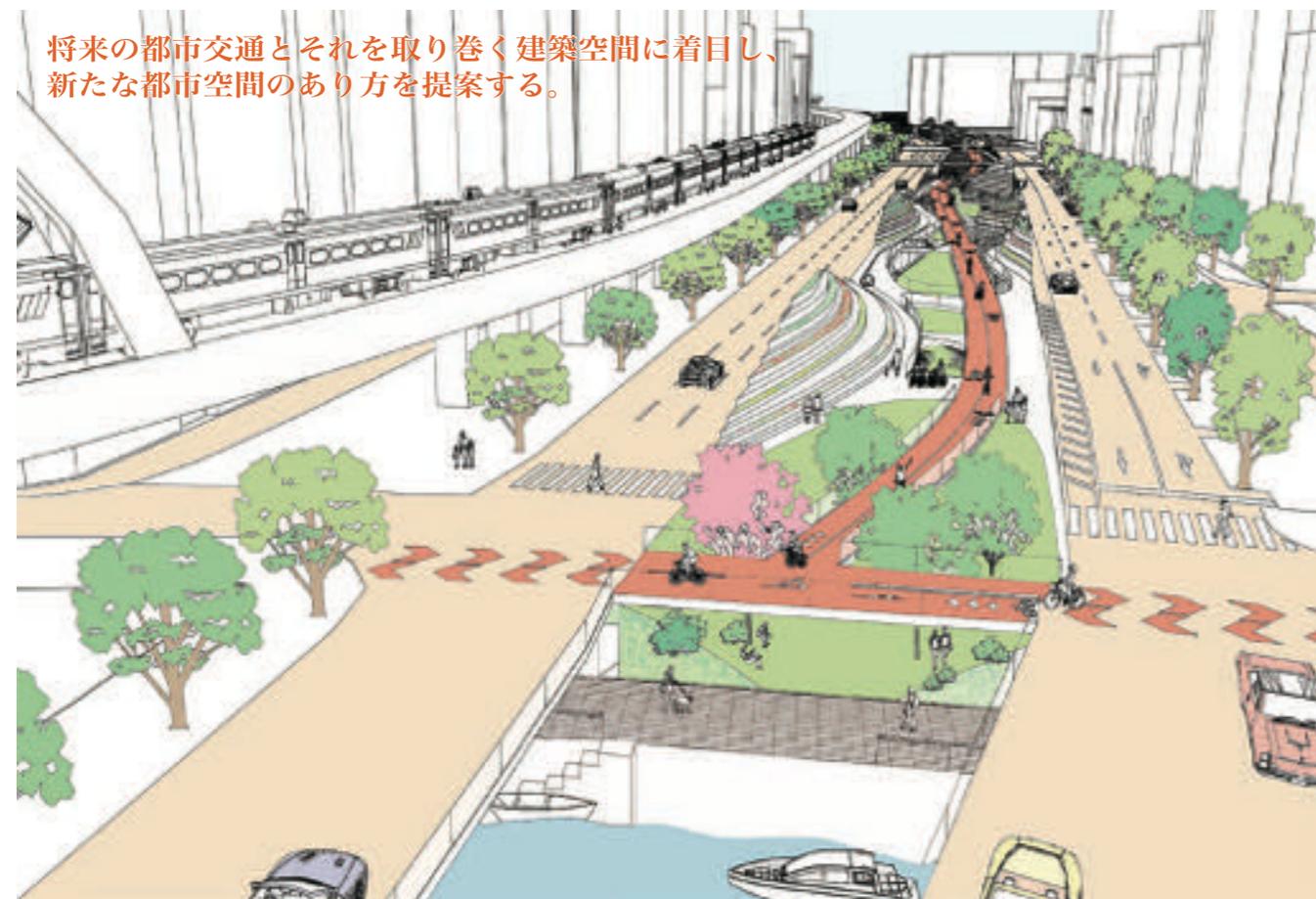


遊佐 舜
Shun Yusa

曾我部研究室
SOGABE lab.

第二のノード The second node

横浜市関内地区における都市交通空間の提案
Proposal of Urban Transportation Space
in Yokohama City Kannai Area



全体パース

将来の都市交通とそれを取り巻く建築空間に着目し、
新たな都市空間のあり方を提案する。

山家 自転車のスピード感については考えていますか。日本の様にゆっくり走るものか、ヨーロッパの様に速く走るものか、どちらをイメージしていますか。

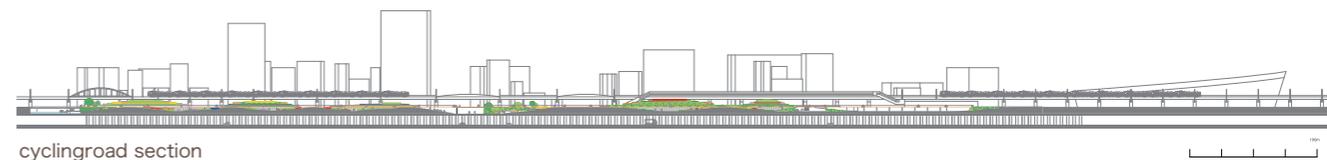
遊佐 ゆっくり走るもの、速く走るもの、どちらも共存しているイメージです。

山家 歩いている時と自転車に乗っている時で、スピードが違うと見えてくるものが違うと思うのですが、それに対してランドスケープ的に工夫したことはありますか。

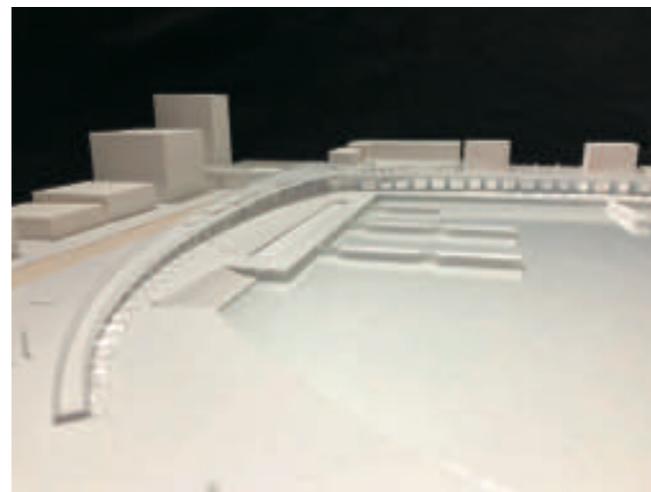
遊佐 途中で乗り降りができるポイントをいくつか作って、車線を繋いでいるところです。

内田 周辺部の移動に関して、関内の街に入っていくにはサイクリングロードを降りて歩いて行くのですか。

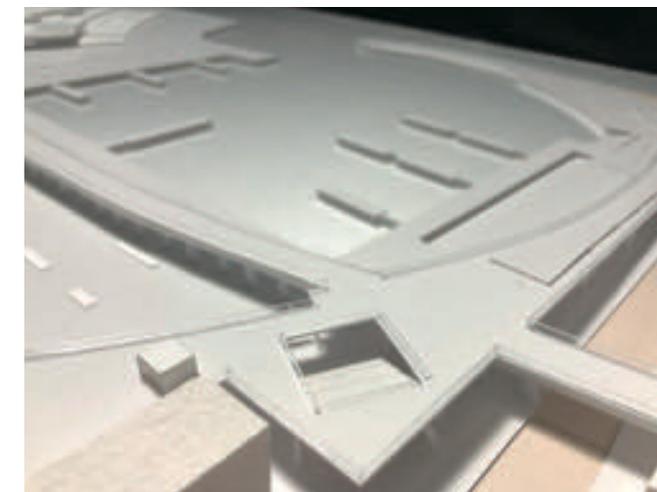
遊佐 自転車の停める位置を工夫していて、駐車場の一部を利用して駐輪場のストップを面的に広げつつ、いくつも繋いで停めたり、降りたりができるように計画しています。



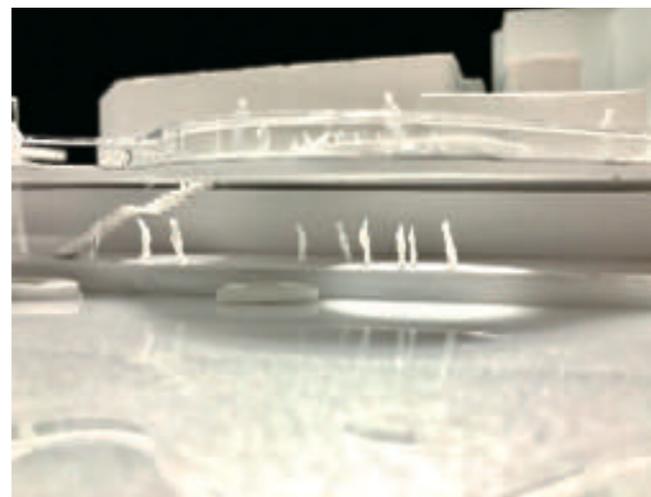
cyclingroad section



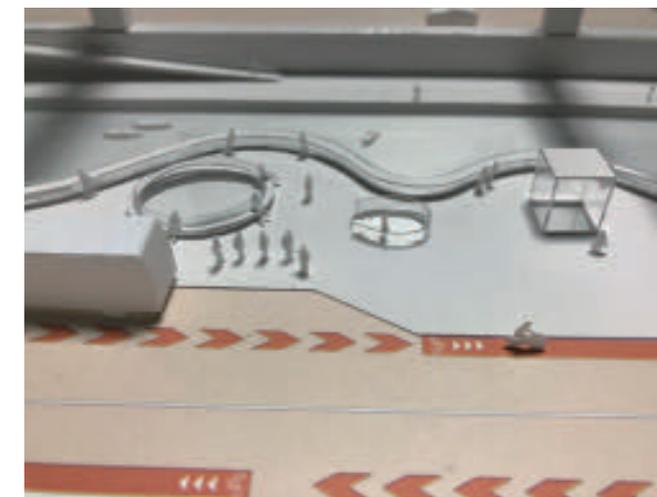
象の鼻防波堤からプロムナードへ緩やかなスロープが続く



イベントホールから水上交通駅を見る



水面より水際のステージを見る

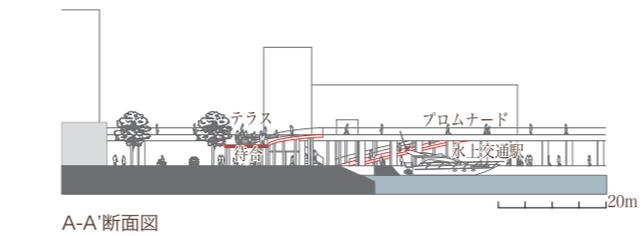


待ち合いベンチ越しに堀川を見る

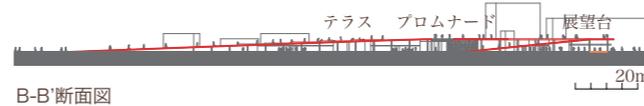
1. 象の鼻ターミナル



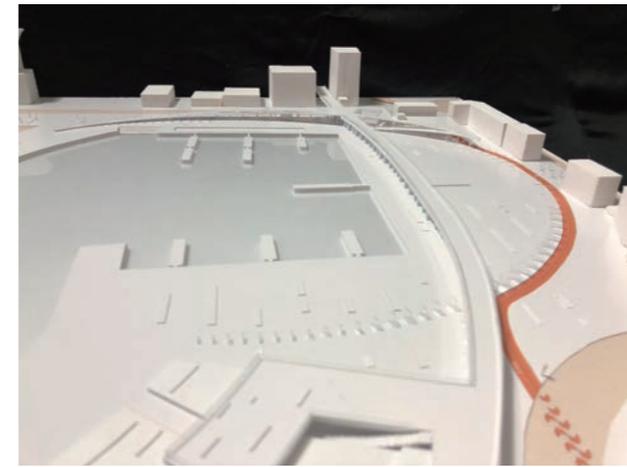
象の鼻ターミナル屋根伏図



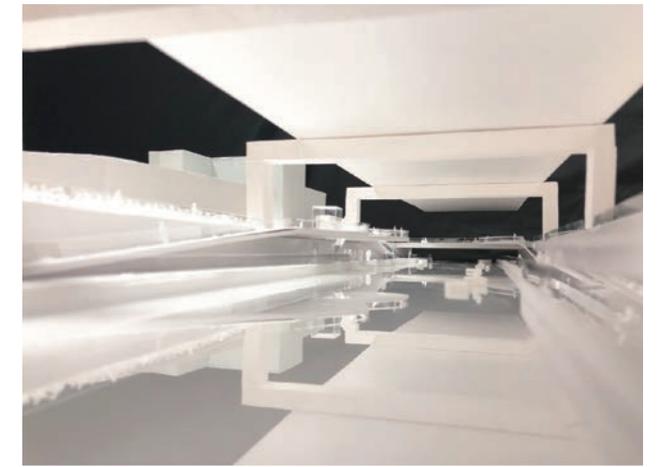
A-A'断面図



B-B'断面図

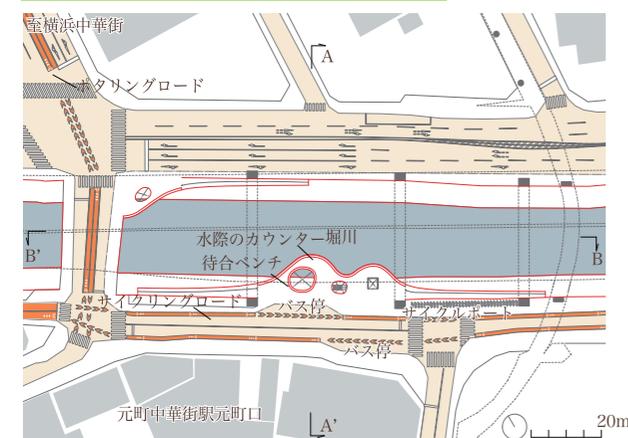


象の鼻テラスより象の鼻ターミナルを見る

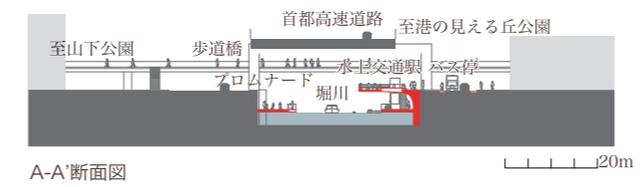


堀川よりプロムナードを見る

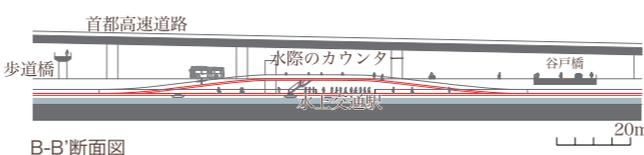
2. 堀川プロムナード



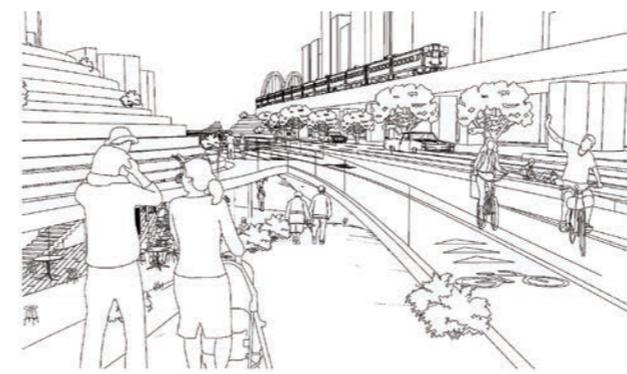
堀川プロムナードG.L±0



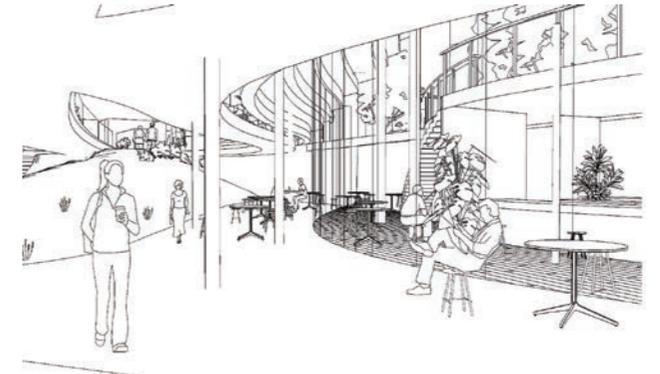
A-A'断面図



B-B'断面図

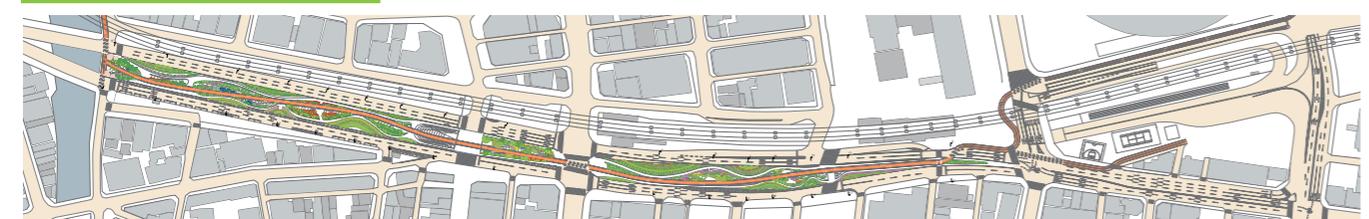


半地下空間に地上階からアクセスするポイント

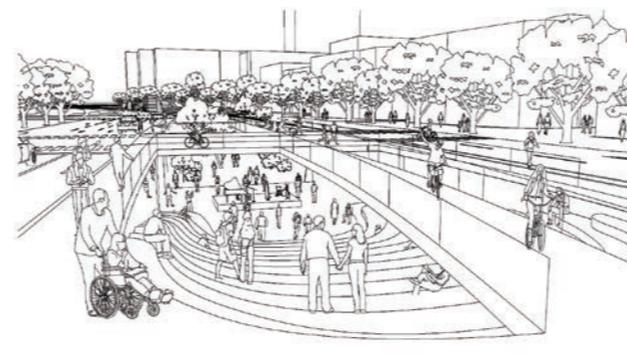


吹き抜けと内部空間越しに外部の景色が見えるレストラン

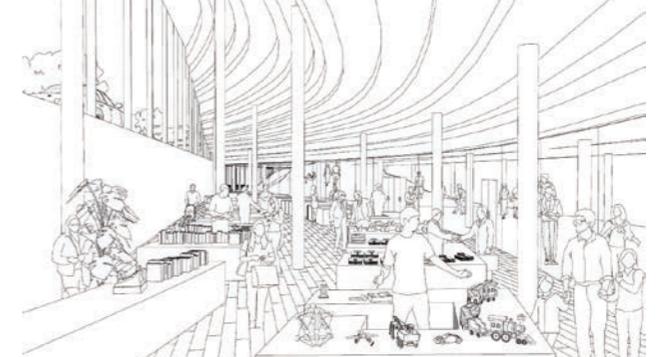
3. 関内外ライン



関内外ライン屋根伏図



オープンエアホールはイベントに特化した空間



関内外で営んでいるお店のポップアップストアが楽しめる商業空間

卒業研究

吉村圭司

矢吹拓也

中村圭那

馬鳥夏美

竹島大地

千代田彩華

野々村明佳里

後藤伸太郎



●ディプロマ賞



吉村 圭司
Keiji YOSHIMURA

山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

放浪する領域
Wandering area

ドヤ街の暮らし方に着目した町づくり拠点の提案
Proposal of town planning base focusing on the way of life in Doya street



寝る以外の行動をそとで行うドヤ街
街の余白を再構成し暮らし方を継承していく

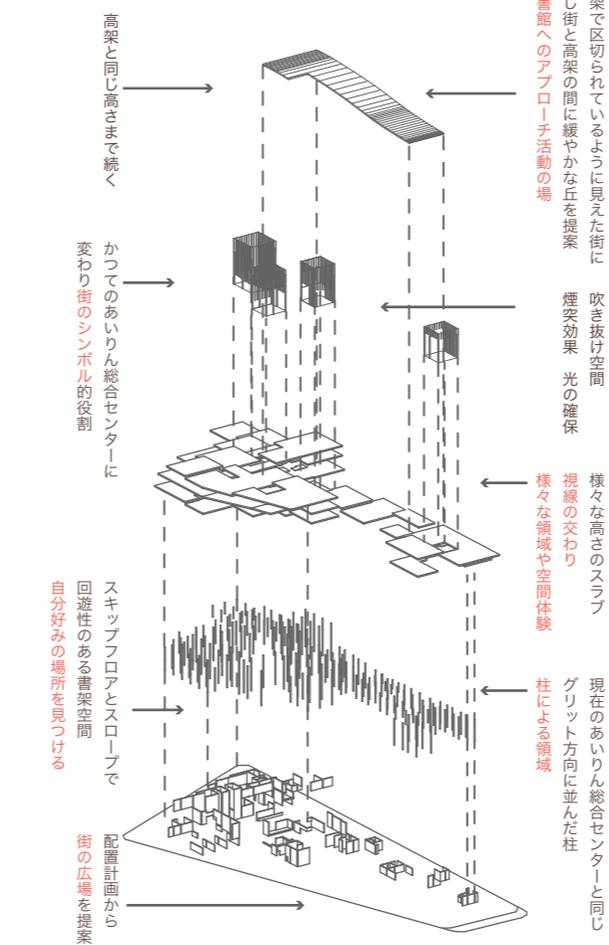
高橋 あいりん地区は、周りにどんな規模と高さのヴォリュームのものが建っていて、それはどんな場所になっているのですか。

吉村 小さい居場所の宿泊施設が集まっていて、現在日雇い労働者が高齢化で減少するにあたって、まち自体も福祉のまちになったり、人が少なくなったりしています。

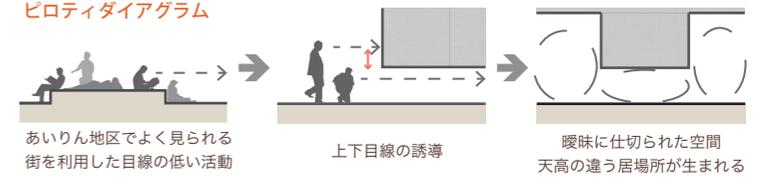
藤野 私も高橋さんと同じ感想でプレゼンテーションがとても良かったと思います。目線レベルのパスがあるので、こちらから見たらこう見えるというのが素直に伝わってきて、それが本当に分かりやすいなと思いました。

高橋 一つの建築のようなのだけれども不思議に集落のようにも見えるなど、何かそういう風にも出来たかもしれないなと思いました。でも、全体としての印象は応援したくなります。

設計ダイアグラム



ピロティダイアグラム



部分断面図

●優秀賞



矢吹 拓也
Takuya YABUKI

石田研究室
ISIDA lab.

INTERMEDIARY SPACE Intermediary space

現実空間と仮想空間を繋げる媒介空間の提案
Proposal of an intermediary space connecting real space and virtual space

高橋 ストラクチャーは図式的に見えるのだけれども、何かイメージしているのですか。

矢吹 構造は鉄骨のフレームを用い、ポリカーボネートを重ねて立方体を構成しています。一個一個の立方体が、つながる部分があれば取れる部分もあります。400mm のモジュールを利用して建てており、縦動線は階段やエレベーターでの移動になります。

藤野 木と白い大小のいろいろなヴォリュームが三次元的なコンポジション (=構成) というのもあると思いますが、木を活かしきるのか、それともヴォリュームの構成だけで森をイメージさせ木を排除するというようにいくつか手法があったと思います。

矢吹 建物に木を植えたのは、公園にある木と建物に植えた木がグラデーションのようになり、無機質な建物が公園の中で浮いた存在にならないように考えています。



二階の納骨スペースから一階を見下ろす。上下階の活動の様子を感じることができる。



三階の納骨スペースから外部を眺める。ガラスがなく、外部の空気を直接取り込む。



建物入り口部分。大きな開口部から人々を受け入れ、仮想空間に導く。



一階ボーチ内部を見る。連続する立方体が奥まで続く。



●優秀賞



中村 圭那
Keina NAKAMURA

中井研究室
NAKAI lab.

ものがたりが連鎖するまちの図書館
The local library in connected story

梅ヶ丘図書館別館
Annex of Library of Umegaoka

高橋 緑道を横切っていく人がこういうタワーと立体交差しながら地上を歩いていく体験はなかなかできないので、それは面白いと思う一方で、ここに本を探しに来た人は大変だなと思うのですが、そういう現実的な検索機能はあまり気にしないでほしいですか。

中村 本を歩き回って探したり、ふらっと立ち寄って思いがけない本との出会いが生まれることを重視して考えましたが、本はタワーごとに図書分類で分けています。

藤野 街の中に本という知識の象徴のようなものの物量を放り込んでいるということに意味があると思いますが、本の物量を街の中に挿入することで何をしたいですか。どんなことに対してこの物量を見せたいですか。

中村 本を保護するのではなく、使い倒したいと考えて、街の中に直接本の物量を見せています。

図書館をまちのなかに
開いて広げていく



緑道から見上げたパース



緑道を見る



緑道から棚の家(児童書スペース)を見る



断面写真

●優秀賞



馬鳥 夏美
Natsumi BATORI

曾我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

ひとの灯火 Lamplight of people

空き家改修による大三島らしい暮らしの場の提案
Proposal for new living space in Ohmishima
by renovating vacant houses



大三島における空き家を増改築し
美しい風景を残しながら新しい風景を作り出す

藤野 いくつかの建物をむすぶ道というのは、それもデザインしているのですか。それはデザインしていないのですか。

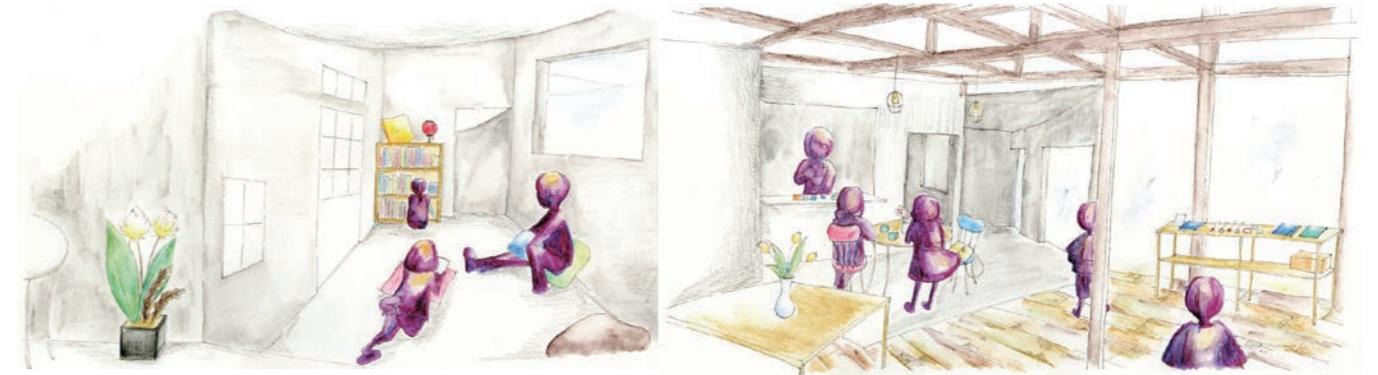
馬鳥 デザインしているというよりは、そのもの、集落にあった目印になるもの、井戸であったりとか、行ったらお話ししてくれるおばあちゃんとか、外構はいじっていない状態で、その集落の良さを生かしてルートを作っています。

藤野 全部一気にまわるような動線がそれほど大事ではないですか。それともやっぱり観光に来た人にまわってほしいという意図もあるのですか。

馬鳥 そういう意図もありながらも、結構入り組んだ道が多くて私が地図を持って歩いていても迷ってしまうようなところなので、迷わないためのルートになっています。

山家 実際歩いていて、コンクリートとかポリカとかが出てくると、逆に今の美しい町がより美しく見えたりとかそういうことがあるのだからなと、掻き立てられるのがあるけど、それを見たかったな、というも若干あります。

馬鳥 ありがとうございます。

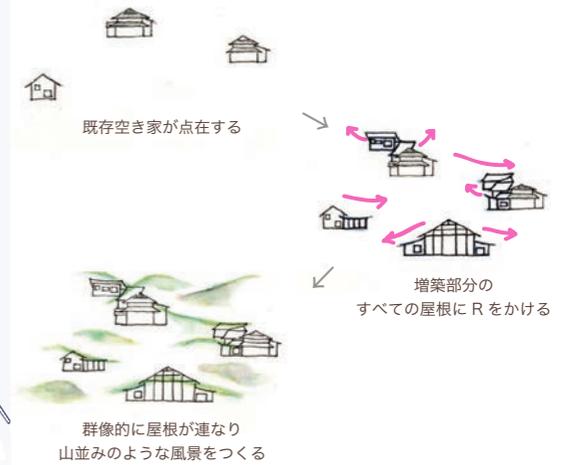


移住者住居 (工房型)

活動拠点



ダイアグラム



移住者住居 (農家型)

レストラン

●優秀賞



竹島 大地
Daichi TAKESHIMA

山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

憶いを綴る住処

The place inherited a memories

住み慣れた場における看取り介護施設の提案

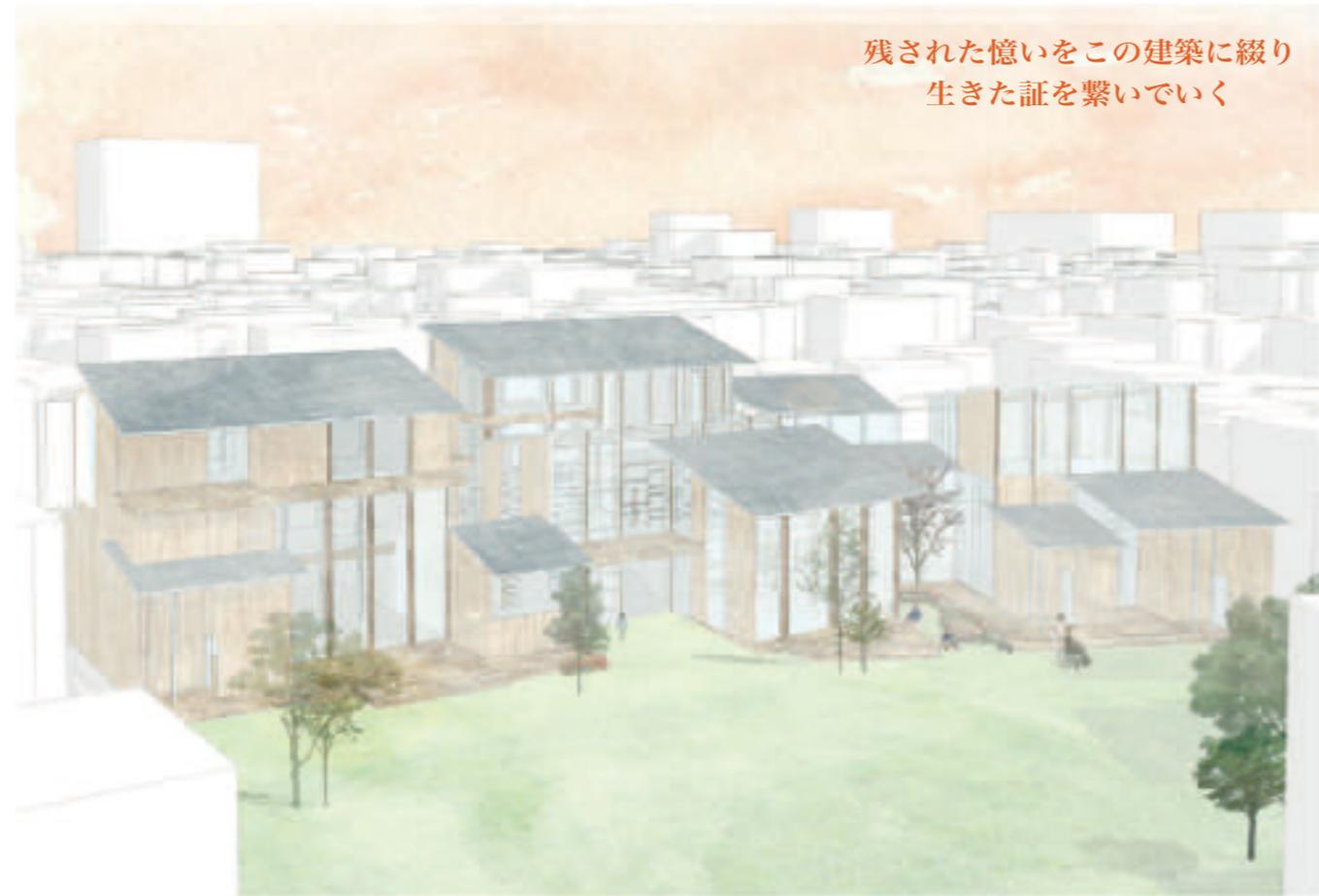
Proposal of a nursing home care facility in a get used to place

藤野 今まで暮らしていた空間とか自分の体の動きなど、そういう物と地続きな場所があってそこで豊かに最後の時間を迎えられるらいいと思うのです。この最後を迎える部屋が自分の住んでいた部屋とどう連続するかに対しての工夫はあったりするのですか。

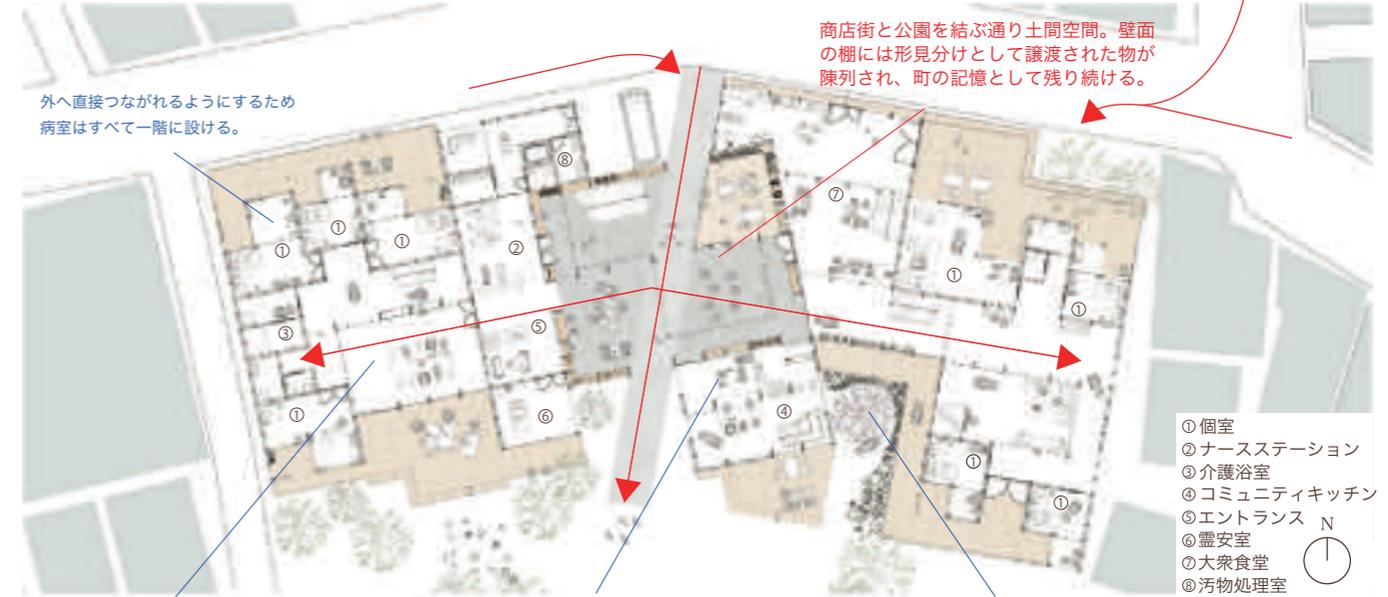
竹島 工夫としては、一つ一つの病室に個々の屋根を設けることで、病室というより家に帰るような感覚で施設を利用できるようにしました。

藤野 共用部とこの空間の間に普段使っていた物が置けるスペースなどがあってもいいと思っていて、そういう距離感や空間の工夫で作れるもので空間と物をどう扱うかがもっと描かれているとより良いと思いました。

高橋 チャイルドケモハウスのように一つ一つの家がたまたまくっついて、一つの建築になっているというアプローチをしていて、そこに見舞うとか寄り添いたいと思って来る人にとってはそういうアプローチがいいなと思ってました。そういう意味ではナースステーションを介さない動線があってもいいと感じました。



残された憶いをこの建築に綴り
生きた証を繋いでいく



外へ直接つながれるようにするため病室はすべて一階に設ける。

商店街と公園を結ぶ通り土間空間。壁面の棚には形見分けとして譲渡された物が陳列され、町の記憶として残り続ける。

- ① 個室
- ② ナースステーション
- ③ 介護浴室
- ④ コミュニティキッチン
- ⑤ エントランス
- ⑥ 霊安室
- ⑦ 大衆食堂
- ⑧ 汚物処理室

10人が集まれる大きなテーブルのあるリビングは、公園に対して開放的にすることで、開かれたリビングとしての表層を強める。

末期のがん患者に食事制限はなく、家族や商店街の店が週替わりで出張して食事を振る舞える。

患者も地域の人も手入れすることのできる花壇エリアがあることで、毎日の日課が生まれたり交流が生まれたりする。

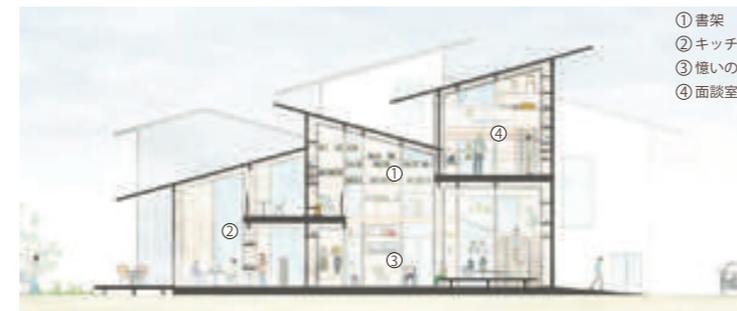


sectionA

- ① リビング
- ② 病室
- ③ 家族室
- ④ 宿泊室



公園と花壇を連続させ敷地内へのアプローチを誘発する。



sectionB

- ① 書架
- ② キッチン
- ③ 憶いの間
- ④ 面談室



商店街に対して余白を作ること溜まりを設け施設へ誘導する。

●優秀賞



千代田 彩華
Chiyoda AYAKA

山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

住人個性

The Resident shows each individuality

暮らしをひらくことで人と地域と繋がる集合住宅
The place for connect between the people and region

地域と住人が混ざり合うきっかけを持つことで
弘明寺の想いを継承していく

高橋 寺子屋を稼げる場にしたい方が良いのではないのでしょうか。

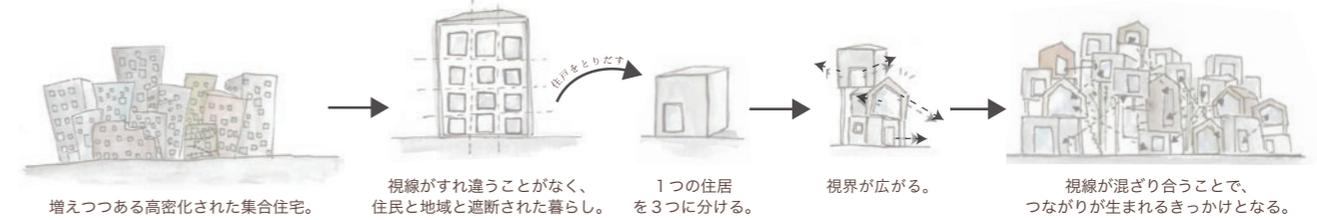
千代田 商店街との競争が起きてしまうのではないかと思います。商店街の要素をこの中の住戸に持って行って、商店街の良さをここから広めたいという思いがありました。

高橋 滞在時間を長くしてあげられるような生業が成立した方が良いと思います。そうすれば弘明寺商店街も世代が高齢化しないで済むのではないかと思います。

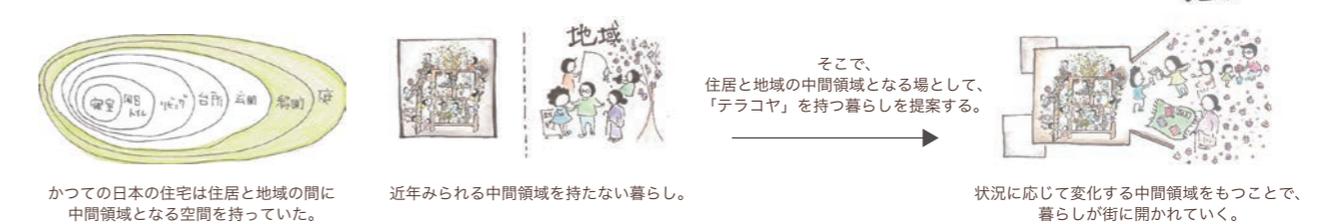
藤野 模型と図面を見ていると、色々な場所を多様につくりたいのだろうということが伝わってきました。それは素材であったり、形のずらし方からそうしたいのだろうなと思いました。その中で私が気になったことは、寺子屋というものがついている住居で開くものと閉じるものがくっついている店舗併用住宅のようなものなのかもしれないけれど、その寺子屋の部分だけが何故家形なのですか。

千代田 寺子屋というものをお寺に近づけてみました。普通のものではなくて違うボリュームを入れることで、目に入りますし、それを開いて見て欲しいと思いました。注目してもらいたくて形は変えて、住人個性の色が出せるように色・形も違います。

カタチのお話



中間領域のお話



● **ディプロマ賞**



野々村 明佳里
Akari NONOMURA

内田・須崎研究室
UCHIDA・SUZAKI lab.

わが国における1940年代前半の「国民住宅」論に関する一考察

A study on the “Kokumin-Jyutaku” during the First Half of 1940s

建築家による論考と住宅営団による住宅基準・規格作成活動について

Focusing on the Discussions by Architects and Creation Activity about Housing Standard by Housing Corporation

1. はじめに

1937（昭和 12）年の支那事変を契機として、日本では軍需工業を中心とした特需が発生した。それに伴い軍需工業地域へ大量の労働者が流入することに對し、既存の住宅供給政策では対応しきれずにいた。その結果として、空き家の減少などによる住宅難や密住などの住宅問題が深刻な社会問題となっていた。

1940（昭和 15）年になると、新体制運動の高まりにより、生活統制のための「国民」という冠詞が多く用いられ、「国民服」、「国民食」の流れを汲んで「国民住宅」という言葉が生まれた。建築家らによる「国民住宅」の議論は住宅の質の向上や「日本人らしい」住宅の追求を目指したものであった一方で、国策的住宅供給の方策は大量生産を目指したものであり、その一端として1941（昭和16）年に住宅営団が誕生した。

2. 研究目的・対象史料

本研究では、理想の「国民住宅」を求める運動の展開を当時の建築家の論考により検討するとともに、「国民住宅」研究が大成しなかった背景を明らかにすることを目的とする。

研究史料として、1939（昭和 14）年から 1945（昭和 20）年までの 6 年間に発行された建築関連雑誌と新聞を使用する。対象雑誌は『建築雑誌』、『住宅』、『建築と社会』、『朗』の 4 誌とし、目次から「国民住宅」または「国民住居」が含まれる記事 27 件を史料とした。新聞は当時全国紙として発行されていた『読売新聞』と『朝日新聞』を用いて「国民住宅」、「国民住居」で検索された 35 件を史料とする。

また、住宅基準・規格の変遷をたどる史料として、西山卯三記念すまい・まちづくり文庫『戦時・戦後復興期住宅政策資料 住宅営団』（日本経済評論社 2001 年）各巻を用いた。

3. 国民住宅の広がり

「国民住宅」関連の雑誌・新聞記事の記事は 1940（昭和 15）年からみられ、1943（昭和 18）年には取東を迎えている（図 1）。対象とした

曾我部 「国民住宅」の基準に期待されていたものは、公共的につくる住宅ではなく、個人の住宅に對するものだったのであろうか。

野々村 議論の出発点としては、個人住宅の改善が目的とされていました。しかし、大量生産・供給の実現のためには国家的能力が必要とされ、その過程において「国民住宅」の議論も国が主導するものへと変化し、その対象も公共的に供給する住宅へと移っていきました。

石田 「国民住宅」の規模に関する基準は曖昧なものであったのか、面積などの制約はあったのか、どちらでしょうか。

野々村 規模に関しては、「庶民住宅の技術的研究」においては、約 60 m²と約 80 m²の大きく分けて 2 種類に分類されていました。その後の規格においても、おおよその規模の規定が数段階に分かれてなされていました。

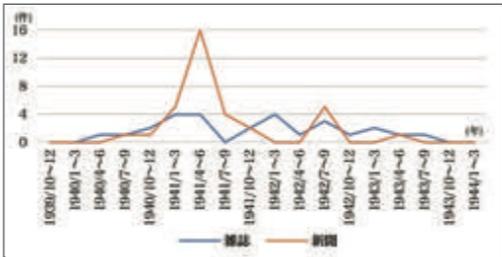


図 1 「国民住宅」関連記事分析表

新聞記事 35 件のうち 24 件が住宅営団に関連する記事であった。このことから、「国民住宅」と住宅営団には関わりがあった可能性がある。また、一般市民は「国民住宅」に對し、“住宅営団の住宅”という認識を持っていた可能性が指摘できる。

一方、雑誌に寄稿された建築家の論考は 1941（昭和 16）年 5 月の住宅営団設立以前に多く発表されており、その後急激に減少している。このことから、住宅営団という国策的住宅供給機関の誕生により、「国民住宅」研究は住宅営団に一任するという流れがあったものとみられる。

4. 建築家の論考からみた「国民住宅」

研究対象とする雑誌記事の分析を行った結果、記事の内容を（表 1）に示す 10 項目に分類することができた。記事の内容から、「国民住宅」の定義については早川文夫の「現在日本国民の大多数が住むべき家を假に名付けて国民住居と呼ぶ。それは現存する家の単なる平均では無く、かゝる家にこそ住むべきであると云ふ、Sollen を意味する。」¹ や石田嘉平の「国民住居とは、国民の翼賛生活を住居に構想した、新生活の基準となるべき、真実爽明なる厚生の住居である。」² など、様々な主張がなされていたことが明らかとなった。しかし、どの定義もおおむね理想を述べたものであり、住宅の大量生産を必要としていた当時の社会状況とは乖離したものであった。

建築家は住宅の質の向上の一環として、衛生面の改善を挙げ、通風や採光などの議論が行われた。また、内田祥文らによって家族制度を重んじ、仏壇や床の間などの「日本の精神」を含むものを住宅に取り入れるべきであるといった主張がみられた³。

以上に述べた他に（表 1）に示すように、「国民住宅」に対する建築家の主張は多岐にわたるものであった。一方、当時の社会状況から、そのような理想の「国民住宅」の実現は経済的に困難であった。そのため、資材の規格統一などによる大量生産の実現を目指した技術革新が求められていた。

5. 住宅営団の住宅供給政策

住宅営団で用いられた住宅基準・規格は営団設立以前に作成された厚生省や同潤会などによる住宅基準・規格をもとに作成されていた。

なかでも、居室規模を室内の空気汚染の許容限度によって定めた建築学会住宅問題委員会「庶民住宅の技術的研究」⁴は、住宅基準に科学的根拠を用いた最初の基準である。また、ドイツの近隣住区論もここで初めて取り入れられた。これら考えは営団規格にも引き継がれることとなり、「庶民住宅の技術的研究」による住宅基準の発展は重要なものであったといえる。

営団住宅に適用する目的で作成された厚生省住宅規格協議会「住宅及び其の敷地設計基準」は「国民住宅規格」「国民住宅設計規準」とも呼ばれている。営団規格はこれを直接の史料としていたとともに、営団住宅は新聞記事において「国民住宅」と称されていたことから、営団住宅も一種の「国民住宅」であったといえる。また、当初の営団住宅には実際に神棚や床の間の位置の指定がなされており、建築家が挙げた「国民住宅」の要素も持ち合わせていた。

しかし、戦況の悪化に伴う物資統制などにより営団住宅は住宅規模の縮小を余儀なくされ、最終的には 1943（昭和 18）年の「臨時日本標準規格第 346 号 居住用建物」において 6.25 坪の住宅規格が発表されるに至った。このようにして、「国民住宅」は戦時下における節減という名目の下、最小限規模の住宅をつくるというファシズム的要素を含んだものへと変容してしまった。

6. まとめ

今回収集した「国民住宅」に関する新聞記事の内容から、一般市民に「国民住宅」という言葉が普及したのは 1941（昭和 16）年の住宅営団設立以後であり、「国民住宅」＝“住宅営団の住宅”という認識であった可能性がうかがえた。建築家による「国民住宅」の議論は科学的根拠に基づいたものから日本の精神を重要視したものまで多岐にわたるものであった。そのため、「国民住宅」は最後までひとつの形に定められることがなかったと推測できる。

理想の住宅を求めた「国民住宅」は戦時下の物資統制などの影響を受け、住宅営団が手がけた最小限規模の住宅へとすり替わってしまった。

それにより、「質の高い住宅」、「日本人らしい」住宅」といった「国民住宅」の本来の要素は、最小限規模の住宅を求める議論のなかで失われていつてしまったものと考えられる。

表 1 「国民住宅」関連記事分析表

年月	記事名	著者	雑誌名	平面	図表	国民住宅とは	厚生の住宅	国民住宅の完成	日本の精神	衛生	経済性	規格統一
1940	6 国民住居の標準	高山英華	建築と社会	×	×	×	×	×	×	○	○	×
	9 国民住居の提唱	早川文夫	建築雑誌	×	○	○	×	○	○	○	○	○
	12 国民住宅の提案	石田嘉平	住宅	○	○	○	○	×	×	○	○	×
1941	「国民住居」の提案	旗映平	建築と社会	○	○	×	○	×	○	○	×	×
	国民住居私案	大村巳代治	住宅	○	○	×	○	×	×	○	○	○
	2 国民住宅の標準庭園	城戸久	住宅	×	○	×	×	×	×	×	×	○
	国民住宅の試案	中野貴一	朗	○	○	×	×	×	×	×	×	×
	3 国民住宅への一試案（大阪）	三好喜三郎	朗	○	○	×	×	×	×	○	○	○
	国民住居と国民食	熊谷兼雄	住宅	×	○	×	○	×	×	○	○	○
	4 国民住居への希望	勝井清子	住宅	×	○	×	×	×	×	○	○	○
	国民住宅へ女としての希望	竹内さく	建築と社会	×	×	○	×	×	×	○	×	×
	5 国民住居のことなどについて	鎌早信夫	住宅	×	×	×	○	×	○	○	×	×
	11 国民住宅懸賞競技設計当選回案	市浦健	建築雑誌	×	×	×	×	×	○	×	×	×
	12 学会の「国民の住宅」競技設計に関連して学会展覧会所見感想	森田茂介	建築雑誌	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	1942	1 国民住宅研究・1	内田祥文	住宅	×	○	○	×	×	×	×	×
2 国民住宅に就て		内田祥文	建築雑誌	×	○	×	○	×	○	×	×	×
国民住宅研究・2		内田祥文	住宅	×	○	×	×	×	×	○	×	×
3 国民住宅研究・3		内田祥文	住宅	○	○	○	×	×	○	×	○	○
4 国民住宅研究・4		内田祥文	住宅	×	○	×	×	×	○	○	×	×
7 国民住宅研究・5		内田祥文	住宅	×	○	○	×	×	×	○	○	×
8 国民住宅研究・6		内田祥文	住宅	○	○	○	×	×	×	○	×	×
9 国民住宅研究・7		内田祥文	住宅	×	○	×	×	×	×	○	×	×
12 国民住宅序論		福井精一	住宅	×	×	×	×	○	○	×	×	×
2 国民住宅序論・2		福井精一	住宅	×	○	×	×	×	○	×	○	×
3 国民住宅研究・8		内田祥文	住宅	×	○	×	×	×	×	×	×	×
1943		4 国民住宅研究・9	内田祥文	住宅	×	×	×	×	○	×	×	×
9 日本内地に於ける標準家族構成について：標準国民住宅の規模決定の一要素として	船越義房	建築雑誌	×	○	×	×	×	○	×	×	○	

引用文献

- 1) 早川文夫「国民住居の提唱」『建築雑誌』, 日本建築学会 No.666,p.690,1940
- 2) 石田嘉平『「国民住居」の提案』『住宅』, 住宅改良会 No.290,p.167,1940
- 3) 内田祥文「国民住宅研究・2」『住宅』, 住宅改良会 ,No.304,pp.43-48,1942 など。
- 4) 建築学会住宅問題委員会「庶民住宅の技術的研究」『建築雑誌』日本建築学会 , No.671,pp.73-101,1941

●優秀賞



後藤 伸太郎

Shintaro GOTO
山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

自治会・町内会を補完する地域活動に関する調査報告

A Research on Regional Activity complementing Resident's Association and Regional Association

庄戸元気づくり実行委員会を事例として
A case of Shodo Enlivened Executive Committee

1. 背景と目的

高度経済成長時代から現在に至り、人口減少社会、高齢社会の波が大都市近郊の郊外住宅地にもやってきている。住民の高齢化やインフラの老朽化が進み、また生活者のライフスタイルの多様化によって、様々な課題を内包するようになった。これらの背景のもと、横浜市栄区の庄戸地区では、「庄戸元気づくり実行委員会」を住民の発意によって立ち上げ、地域課題の解決に取り組んでいる。

そこで本研究では、戸外住宅地の課題を抱えつつも自治会・町内会とは別に、住民主体で地域活動を行う、自立したまちづくりについて解明することを目的とし、現地調査、ヒアリング調査、アンケート調査を実施した。

2. 庄戸地区概要

横浜市栄区庄戸地区は、昭和48年に開発が始まった戸建中心の住宅地であり、栄区の南東部に位置している。この地区は建築協定によって、一戸建ての住宅が多い。多世帯同居住宅の場合は、玄関が二箇所以下の二世帯住宅に建築できる建築用途が限られている。世帯数と人口の動向を見ると、世帯数の変化はあまりないが、人口は減少傾向にある。また、高齢化率は51.9%（平成29年3月調査）となっている。庄戸地区は最寄り駅（JR 根岸線港南台駅）からバスで20分程の場所に位置する。1丁目から



図1 庄戸地区

石田 どのような人を対象にアンケートをとったのですか。

後藤 「庄戸サロン」の運営者と利用者それぞれにアンケートを配布し、回答をお願いしました。

内田 「庄戸元気づくり実行委員会」が成功した背景には、どのような人が率先して行ったのかなどの（運営者側の）様々な要因があったと思いますが、その要因の考察があれば教えてください。

後藤 21人のメンバーの多くが民生委員や役員などを務めた経験がある人であり、そのような人が比較的多く集まったことが今回の成功の大きな要因となっていると思います。また、メンバー各々の経験を踏まえたうえで、行政や横浜プランナーズネットワークなどの外部との繋がりがあり、そこで庄戸地区の課題について考えて行動していたことがひとつの大きな要因となったと考えます。

5丁目まであり、それぞれ町内会が存在している（図1）。

3. 庄戸元気づくり実行委員会

横浜プランナーズネットワークのA氏、B氏、「庄戸元気づくり実行委員会」のスタッフへのヒアリング調査及び、庄戸元気サロンニュースなどの文献などから整理する。

3-1. 庄戸元気づくり実行委員会の立ち上げ

当該実行委員会設立の契機は、横浜市（栄区役所）より「横浜市地域福祉計画」を町内会に持ち掛けられたことから始まる。これは、当該地区は栄区において高齢化が進んでいることや、目立つ地域活動が無かったからである。それを受けて5つの町内会で検討された。結果、一つの町内会より公募で集めて、実行委員会を設立することが発意され、町内会に頼らない住民活動が展開されるようになった。

3-2. 実行委員会のメンバーについて

公募で行おうという意見が出てから、発案者を含む数名が庄戸地区の家一軒ずつにポスティングを行い、メンバーを募った。その結果立ち上げ当初21人のメンバーが集まった。このメンバーは、5つの町内会から最低でも1人は参加している。また、男女比率はほぼ均等であり、半数以上は定年を迎えた方である。そして、民生委員や茶道の先生、役員OB、設備（水道など）に詳しい方など、多様なメンバーによって構成された。

現在、「庄戸元気づくり実行委員会」は立ち上げてから10年経ち、メンバーは21人で運営されているが、一時期はメンバーが30人にまで増えた時期もあった。

3-3. 庄戸の元気づくり拠点運営

「コミュニケーションが取れる環境創り」を指針とし、活動するために、委員会で何が必要か話し合ったところ「拠点が必要」という結論に至った。庄戸地区では町内会館を5町内会で1つ共有している。ただし活動

を行う際、1つの団体が一定期間や丸一日確保することが厳しい状況であった。そこで実行委員会が行う活動はそういった拘束が少なく、気軽に来られる場とする為に当該地区にある「空き家」を利用することにした（図2）。



図2 空き家を拠点とした庄戸サロン

3-4. 庄戸元気づくり実行委員会の活動

現在行われている活動はサロン活動、イベント、学援隊、くらし応援、資源回収である。サロン活動は、子育て支援「すくすく」多世代交流「花水木」「一般利用」がある。イベントは季節に応じて年一回夏祭り、そうめん流し、餅つき大会が行われている。学援隊は庄戸小学校、(旧)庄戸中学校を中心にあいさつ運動、キャリア教育、家庭科の授業支援、平和教育を行っている。くらし応援は、地域の方から木の剪定や草刈りなどの依頼を受けて行う活動である。

4. アンケート調査:運営者及び利用者からみた庄戸地区と庄戸サロンについて

4-1. 調査方法

調査は2017年10月27日（金）～2017年11月29日（水）の毎週水、金曜日に実施し、その間

表1 アンケートの回答数

利用者	運営者	合計
27	29	56

に活動に参加された利用者及び運営者を対象とした。調査内容は、①利用者・運営者の属性について、②庄戸地区サロンについて（利用者のみ）、③サロン運営者について（運営者のみ）、④庄戸地区について（利用者・運営者）である。アンケートの回答数は（表1）の通りである。

4-2. 調査結果

主な調査結果について説明する。まず、「庄戸地区にどんな機能・場所が欲しいか」については（表2）の通りである。利用者・運営者共に「買い物ができる」「気軽に立ち寄れる」が高いことがわかった。庄戸地区には徒歩で気軽に買い物にいける環境がなく、またカフェなどの室内で立ち寄り、時間を過ごす場がないためだと考えられる。

表2 庄戸地区に求める機能・場所

	利用者	運営者
買い物ができる	10	14
くつろげる	9	4
運動ができる	6	5
気軽に立ち寄れる	6	7
子供を連れていける	7	3
音楽ができる	6	3
展示・発表ができる	3	2
無回答	19	12

次に、「庄戸サロンはあなたにとってどんな場所か」については（表3）の通りである。利用者・運営者共に「情報交換の場」が高いことがわかった。調査実施中も、利用者の間で保育園や育児についての意見交換をしていた他に運営者に助言を求める場面を見ることができた。また、利用者の「友達と会える」運営者の「新たな人との出会いの場」より、人との出会いの場としても評価されていることが伺える。

3つ目「庄戸地区の課題とを感じる点は何か」については（表4）の通りである。利用者・運営者共に「住民の高齢化」「交通の便」が高いことがわかった。「新たな住民の参入」「若者の定着」も同程度の数値であることから、高齢者が増えていく一方で、新たな住民が増えないことについて課題として認識されている。また、運営者の方は「空き家の増加」も課題だと感じていることがわかった。

5. まとめ

以上より、既存の自治会・町内会が担いきれない地域課題を、地域住民の有志から地域課題を見出し、活動する団体が存在することは、高齢者や子育て世代の方など、郊外住宅地に住む人たちの生活を支えるものになっていることがわかった。また、郊外住宅地が成り立つうえで、「庄戸元気づくり実行委員会」のように「テーマ型」で活動することは、住民の安心・充実を生みだす地域社会に繋がると考える。

参考文献

- 1) 庄戸第一地区建築協定 - 横浜市都市整備局 - <http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/ken-kyoutei/sakae/367.html>
- 2) 横浜市統計ポータルサイト <http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/>

表3 庄戸サロンとはどんな場所か

	利用者	運営者
情報交換の場	13	14
友達と会える	20	4
お喋りの場	19	4
新たな人との出会いの場	9	13
学びの場	9	8
息抜き	12	1
生活の一部	8	4
くつろげる場所	12	0
その他	0	3
無回答	0	6

表4 庄戸地区の課題とを感じる点

	利用者	運営者
住民の高齢化	14	20
交通の便	11	20
空家の増加	5	19
若者の定着	7	9
担い手不足	5	9
新たな住民の参入	7	6
賑わいや活気が少ない	4	5
教育環境	3	4
まちの美化	3	3
防災対策	0	1
くつろげる場所が少ない	0	0
犯罪が多い	0	0
無回答	6	4

高橋 晶子

Akiko TAKAHASHI



1958 年 静岡県生 京都大学卒、東京工業大学大学院修士修了、篠原一男アトリエを経て
1988 年 ワークステーション共同主催
2004 年 武蔵野美術大学教授

作品に高知県立坂本龍馬記念館、横浜市仲町台地区センター、岐阜県営住宅ハイタウン北方高橋棟、野毛山動物園ふれあいコーナー、芦北町交流センター、球磨工業高校管理等など
JIA 新人賞、日本建築学会作品選奨、グッドデザイン賞など受賞

総評

かつて非常勤で伺っていた神奈川大学建築学科、現代の社会状況に向き合った多様な作品に刺激を受けました。

全体的に図面がしっかり描けていました。他所の講評会と比べて作品説明に図面の果たす役割が大きく成果物の量も膨大で、建築計画にかけたエネルギーが伝わりました。いっぽう、「どんな質の場所、空間を目指したか」「どんな建築的思考にこだわったか」についてのプレゼンテーションがいささか弱いように感じました。

発表時にプログラミングと建築デザインの説明が優先されて作品の根っことなるモチベーションへの語りが削られたり、語られたけれども私が共振に至らなかつたり、いくつかの複合要因が前述の印象に繋がったと考えます。それから、私自身が縛られている図面への既成概念も一因かなと思います。音楽でいえば楽譜のように伝達装置として機能する図面を、作品として自立するドローイングに昇華させるのは大変。特に作品全体のトーンに図面が一体化していない場合は、懸命に描いてるだけに、残念だなあと感じます。

建築をつくることは、あるひとつの筋をつくることでもあります。卒業設計は与件そのものを自身で設定するので、図面に実るまでの思考や方法の筋道が理解できることもあります。

個人的には、どれだけ考えさせられたかを評価基準にしています。それを見たことではっとする、既存の枠組みにとらわれていた自身を俯瞰させるような作品。今回もそんな作品に出会えて良かったです。皆さんの今後の健闘を祈ります。

藤野 高志

Takashi FUJINO



1975年 群馬県生まれ
1994年 群馬県立高崎高校卒業
1998年 東北大学工学部建築学科卒業
2000年 東北大学大学院 都市・建築学 博士前期課程修了
2000年 清水建設株式会社 本社設計本部
2001年 はりゅうウッドスタジオ
2006年 生物建築会設立
2012-15年 東北大学 非常勤講師
2012年- 前橋工科大学 非常勤講師
2017年- 東洋大学 非常勤講師
2017年- 武蔵野大学 非常勤講師
2018年- お茶の水女子大学 非常勤講師

総評

私はいつも卒業設計に期待する。どうしようもなく不安にさせる作品に出会うことを。持ち合わせの知識では理解できず、評者自身が批評される緊張感を。優れた作品は、既成の常識を否定し、未知の世界に己を賭ける。見る方も創作者と同じ覚悟を持って、全力で理解しようとする。そんな興奮を求め審査会場に足を運ぶ。

印象的な下記の3作。納骨堂の「矢吹案」は模型とドローイングが濃密。残念なのは、藤本壮介のチュイルリー公園の作品に似ていること。学生とは言え、類似作があれば評価は下がると危機感を持つべきだ。せめてディテールや素材が、模型のようにブルータルであったなら…。小さな建築の連続の「馬鳥案」は、現状の島社会への問題意識は伝わってこそ、プログラムも既視感がある。この島固有の回答ではないが、建築を超えた地域全体に対する提案であることと、丁寧な設計態度に好感を持った。本棚タワーを並べた「中村案」。知の物量が可視化された風景という、ある種前時代的な提案は、現代への皮肉。本人が気づいているかは疑問だが、今回批評性を一番感じた。本をこれ見よがしに陳列し、人を呼び込み、活動を見せる必然性を突き詰めて、日常風景への不満が 何であるかを掘んで欲しい。

他大との比較になるが、神奈川大学は、寸法や動線計画の説明が充実している一方、なぜその作品が必要なかの説明が足りない。形は作れど批評は苦手。卒計は他の課題に比べ、対外的評価の機会に恵まれ、読み物として一人歩きする。誤読も含め様々な解釈を生み出し、議論のきっかけとなる。そこで評価を得たいなら、批評性を備えることだ。自作の批評を繰り返すことこそ、その第一歩である。

石田 敏明

Toshiaki ISHIDA



概評

例年、卒業設計ではポスターセッションの後、教員の投票により上位の作品が選出されプレゼンテーションした後、ディプロマ賞や優秀賞が決定される。ポスターセッションでの応答を受けた形でプレゼンに臨むことから、プレゼンはより戦略的に行う必要がある。問題提議を行い、それをどのようにして解決し、建築を通して第三者に明瞭に提案の魅力を伝えるかが評価の鍵になる。

優秀賞に選出された卒業設計の6点はそれぞれテーマが異なっていて興味深かった。いずれも弱者への眼差しやまちづくりなど今日の社会問題をテーマとした力作ではあるが、主体的な見方、意味づけが強く、客観的な見方がやや弱いように感じた。客観性は多角的な見方や客観的なデータの裏付けが必要となるだろう。

一方、修士設計では卒業設計に比べ、アンケートやヒアリングの圧倒的なデータ収集から読み取ったアイデアと、その論理的な展開が求められる。つまり、思いつきだけの案は通用しない。地味だけど一つ一つ積み重ね、推敲した提案は十分に説得力を持ち得るし、納得させられる。今年は何都市型のランドスケープがやや多く、建築で勝負しようとした案は残念ながら無かったように思う。個人的には今日の建築を歴史的な位置付けから構想、提案することも必要だと思う。建築の歴史は様式の歴史でもある。建築は結果的にはカタチを纏うものであるのでカタチにも責任を持って欲しい。そのあたりがやや弱いと思った。

卒業論文、修士論文は文献調査やヒアリング、アンケートなど地道な調査の積み重ねが見て取れたし、独自の視点による発見的な事象があったのは良かったと思う。

内田 青蔵

Seizo UCHIDA



総評

2017年度の卒業設計・修士設計を見た。近年、いつも思うのだが、図面に魅力が感じられない作品が多いように思う。せっかく CAD ではなく手書きの図面なのに、まったく魅力が感じられないのだ。中には、まったくのフリーハンドによるドローイングもあった。フリーハンドはフリーハンドの魅力があるが、定規を使った手書き図面のことだ。

学生時代に締め切りの図面をもとに発表会があると、目を釘付けにされた図面がしばしばあった。半世紀前の我々の時代でも、図面はとにかく面倒な代物であった。一方、先生方は手を入れることを要求し、とにかく書き込むことを求められた。そんなときは、とりわけ、床のタイル張り仕上げなどの表現は、シールを貼ってごまかしたりもしたが、やはり手書きのものには敵まなかつた。一日中煉瓦目地を書き続けていた強者もいたし、ルイス・カーンばりの断面図の地面をロットリングで延々と引き続ける猛者もいた。見ているとまるでパカみたいで、しかも何かに取り憑かれているような独特のオーラも感じられ、真似もできなかった。しかし、出来上がった図面を見せてもらうと、心が凍ってしまった。言葉がでないのだ。こんな図面が仕上がるんだ。やっとの思いで感じながら、自分の才能の無さや努力の無さ、あるいは自分自身への愛情の無さに気付かされた。やはり、自分の思いが強ければ強いほど、書くことに時間を割くことが必要だろう。もっともっと図面と格闘しなければならぬのだ。そんな、格闘の様子が感じられる図面が見たものだ。それは、うまさを超えた”心”や”魂”の表現された図面のことである。こう書いていて、いまさらながら、自分が歳をとったことを感じている。

山家 京子

Kyoko YAMAGA



総評

卒業設計本審査会場をざっと見て回った印象は「薄い」だった。以前は敷地周辺の調査分析やデザインコンセプトに A1 で 2、3 枚は要していた。見づらいほどの密度で仕上げた図面もそれなりにあったと記憶している。ここ数年、特に今年の卒業設計の図面は敷地分析やデザインコンセプトはあまり表現されておらず、見やすく拡大された必要最小限の図面が並んでいるだけである。図面提出後に模型を完成させる工程からか、模型写真の類もあまり見られない。もちろん薄くて美しい図面というものもあるのだが、設計の意図を伝える図面の密度がこれでいいのか疑問である。また、設計を指導する際にプログラムへの関心が高く、オブジェクトとしての建築、設計手法への意識が薄いと感じる場面が増えた。プログラムはもちろん重要だが、そのこだわりには必ずしも建築デザインに結びつかないものもある。設計者というより企画者目線、モノとしてではなくコトとしての建築への関心といえよいのだろうか。最終的にオブジェクトとしての建築を消せないのであれば、やはり建築そのものの作り方に向き合う必要がある。

卒業論文、修士論文は昨年同様、計画系の論文が少なく、計画系指導教員として残念な結果となった。研究室活動の中核を占めるまちづくり活動は、学術論文としてまとめにくく、研究室の活動と個人の論文との関係もあり、なかなか難しいこととは承知している。それでも、都市空間やまちづくりに関する研究だけでなく、それらの活動を論文としてアウトプットする方法についても模索していきたいと思う。

学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ

建築デザインⅡ

建築デザインⅠ

設計製図Ⅱ

設計製図Ⅰ



担当

曾我部 昌史（教授）、吉岡 寛之（特別助教）、岡村 晶義（非常勤講師、アトリエ鯨）、佐々木 龍郎（非常勤講師、佐々木設計事務所）、渡瀬 正記（非常勤講師、設計室）

Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA), Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

城間 リカルド（M1、TA）、田村 駿介（M1、TA）

Ricardo SHIROMA (M1, Teaching Assistant), Syunsuke TAMURA (M1, Teaching Assistant)

総評

二つの複合建築の課題である。いずれも、プログラムを組み立てるところから手がけ、複雑な構成の検討をし、構造や動線を立体的に解く必要がある。粘り強くエスキスを重ねなければ正しく計画をまとめることはできない。

第一課題では、展示、待合所など多様な場の関係のつけ方が鍵となる。そのためには、地下鉄駅出入口、遊歩道のある水路、街の様子などに広く目を向け、検討を行う必要がある。鈴木くんの提案では、隆起し積層する地面のような床に種々の場が点在し、街を散策するように建築内外の活動をつないだ。黒柳くんの提案では、斜めに抜ける吹き抜けに絡み合いながら不規則な形の場が用意され、互いの活動の様子を伺う。両者とも複雑な構成を粘り強く解いた。

第二課題では、各人がこの先の暮らし方の多様化に対して意識を開き、新たな建築空間の構想へとつなげる必要がある。暮らしの場を具体的に想像しようというスタンスも重要である。佐塚くんは、種々の共用スペースを関連させながら立体化し、全体として緩やかにこの建物特有のライフスタイルを作り出した。前田さんは大小の閉じ気味のキューブとそれらの外周に広がる場との対比を生かしながら、共用部の開き具合をコントロールした。また、上記の二提案を含め、要求図面のみにとどまらず、図面表現全体に水準の高いものが複数あったことを記しておきたい。

（曾我部）

非常勤講師 経歴

岡村 晶義

Akiyoshi OKAMURA

1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校（現早稲田大学芸術学校）卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎

Tatsuro SASAKI

1964年生まれ、1987年東京都立大学（現首都大学東京）工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程満期退学、1992年（株）デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記

Masanori WATASE

1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立

第一課題 街のインフォメーションセンター

地域に暮らす人たちの居場所（地域の居場所）と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場（来訪者の拠点）のコンプレックスである。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをとて今日的な役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。

敷地は、地下鉄駅、船着場、幹線道路に面する交通の結節点にある。それらとの関係を動線として解きながら、建物内のいろいろな場とのつながりかたを検討する。利用者、時間帯などにも意識をしながらまとめる必要がある。

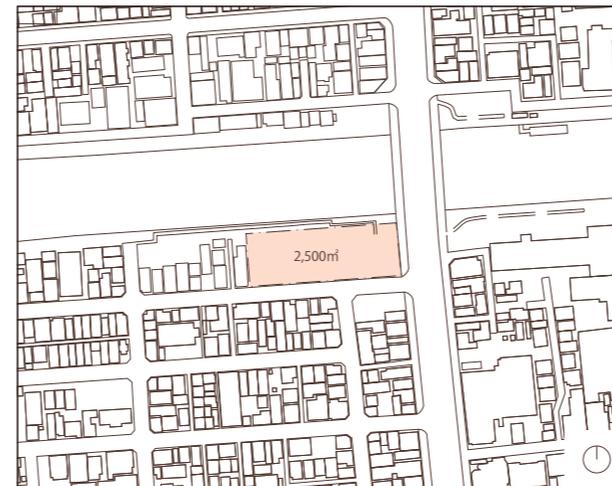
【設計条件】

敷地：東京都江東区清澄3丁目

用途地域：準工業地域、商業地域 敷地面積：2,500㎡

地下階を設け地下鉄駅とつなぐこと。

延床面積は4,000㎡～6,000㎡。地上部分は3層以上とする。



第二課題 50人が暮らし50人が泊まれる、この先の暮らしの場

共に暮らすことで自分の好みにあった豊かな時間が生み出される、そういう住空間を提案すること。

この建物は、住まいの場所とこの場所での暮らしを特徴付けるサービスの場所とで構成され、住まいの場所は、賃貸住宅部分と宿泊施設部分にわけられる。共通のライフスタイルや必要とするサービスにより特徴付けられる50人の住まいがあり、その暮らしに関連した共用スペースやサービス系施設が特有の雰囲気を生み出し、その雰囲気が宿泊客や地域の人たちにアピールする。単に、賃貸住宅、宿泊施設、サービス関連施設とが固まってあるものではなく、それぞれが有機的に関係を持つことで、何らかの特徴的な雰囲気を備えた居場所が生み出されるような計画を構想しなければならない。

敷地は関内地区の中央にある。歴史的背景や現状の周辺状況についての調査をもとに、計画に反映させること。

【設計条件】

敷地：神奈川県横浜市中区太田町3丁目

用途地域：商業地域 敷地面積：約777㎡

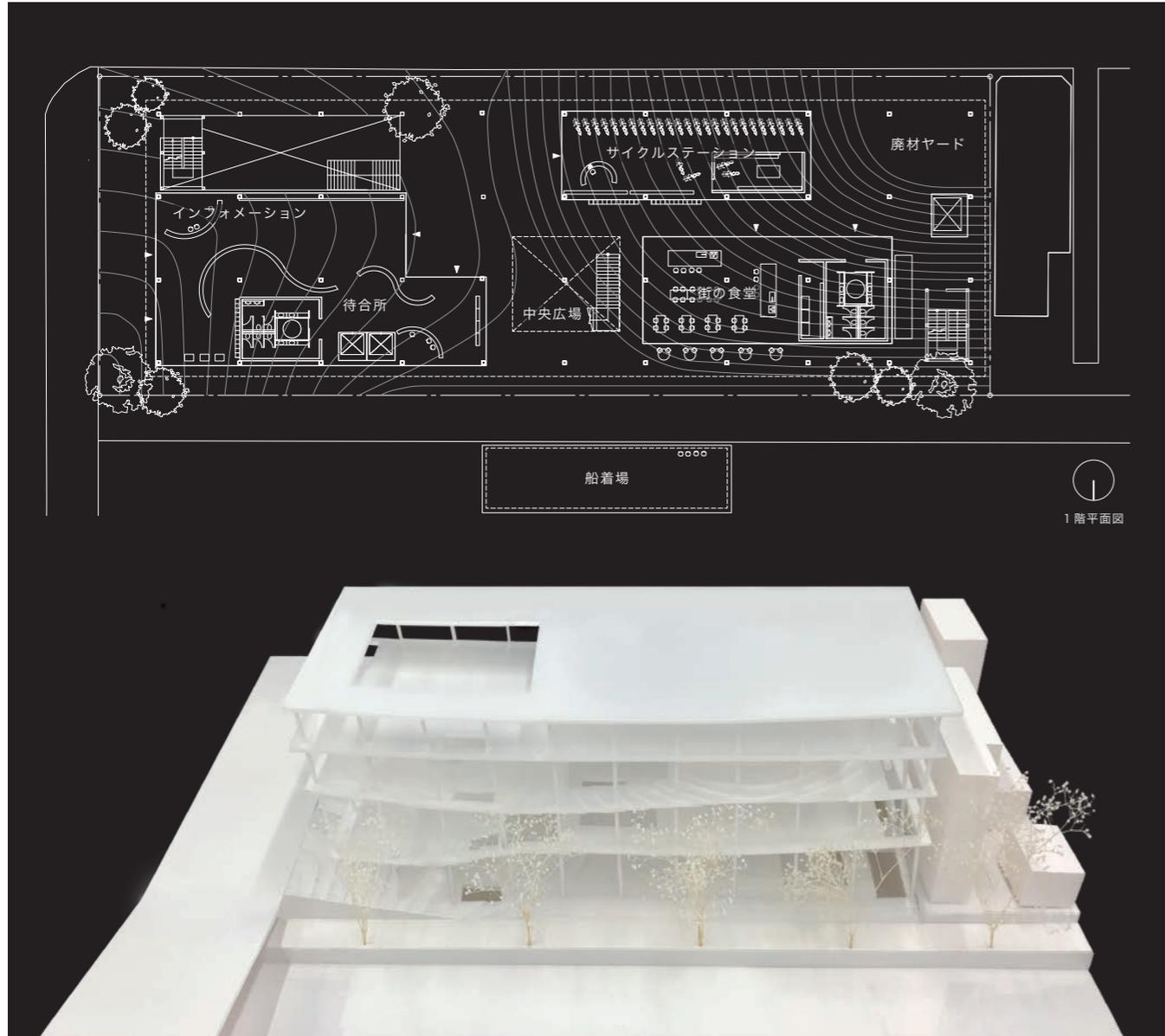
延床面積は4,500㎡～5,500㎡。地下を設ける場合は1層まで。

道路斜線制限、高さ制限は厳守。



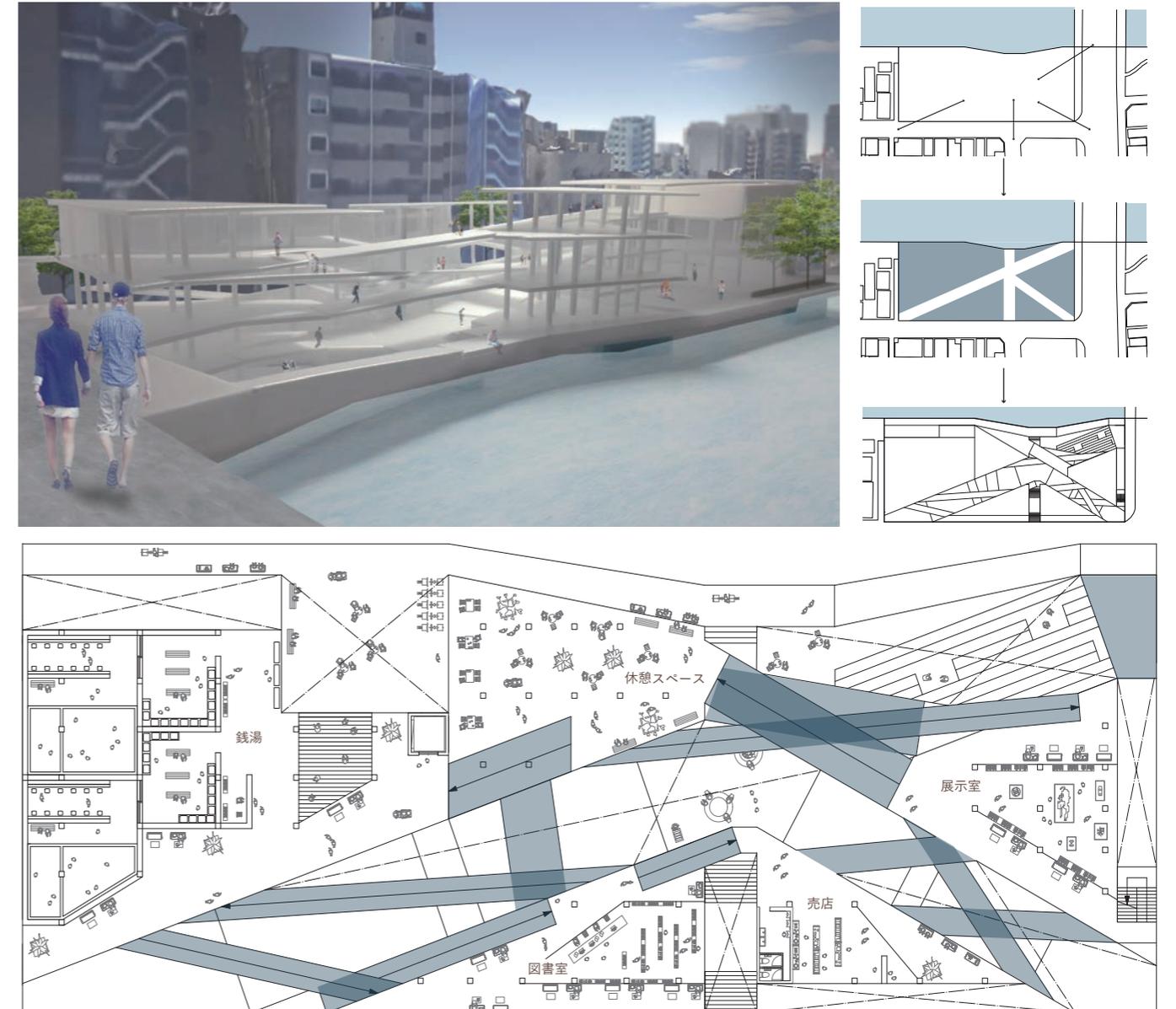
鈴木 啓生
Yoshio SUZUKI

新たな公共性とライト・ストラクチャーの可能性
New publicity and Possibility of light structure



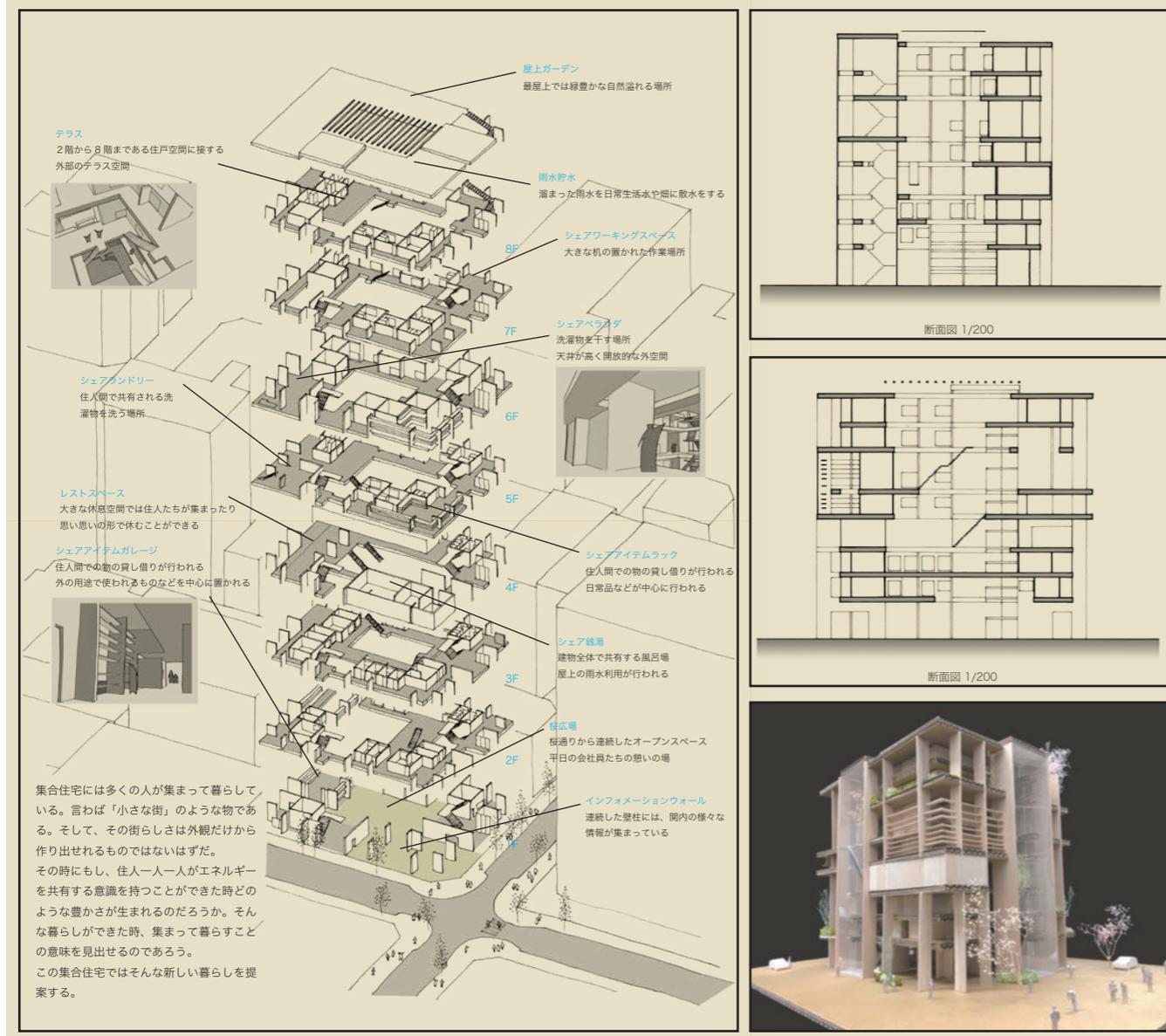
黒柳 和大
Kazuhiro KUROYANAGI

交差
Cross



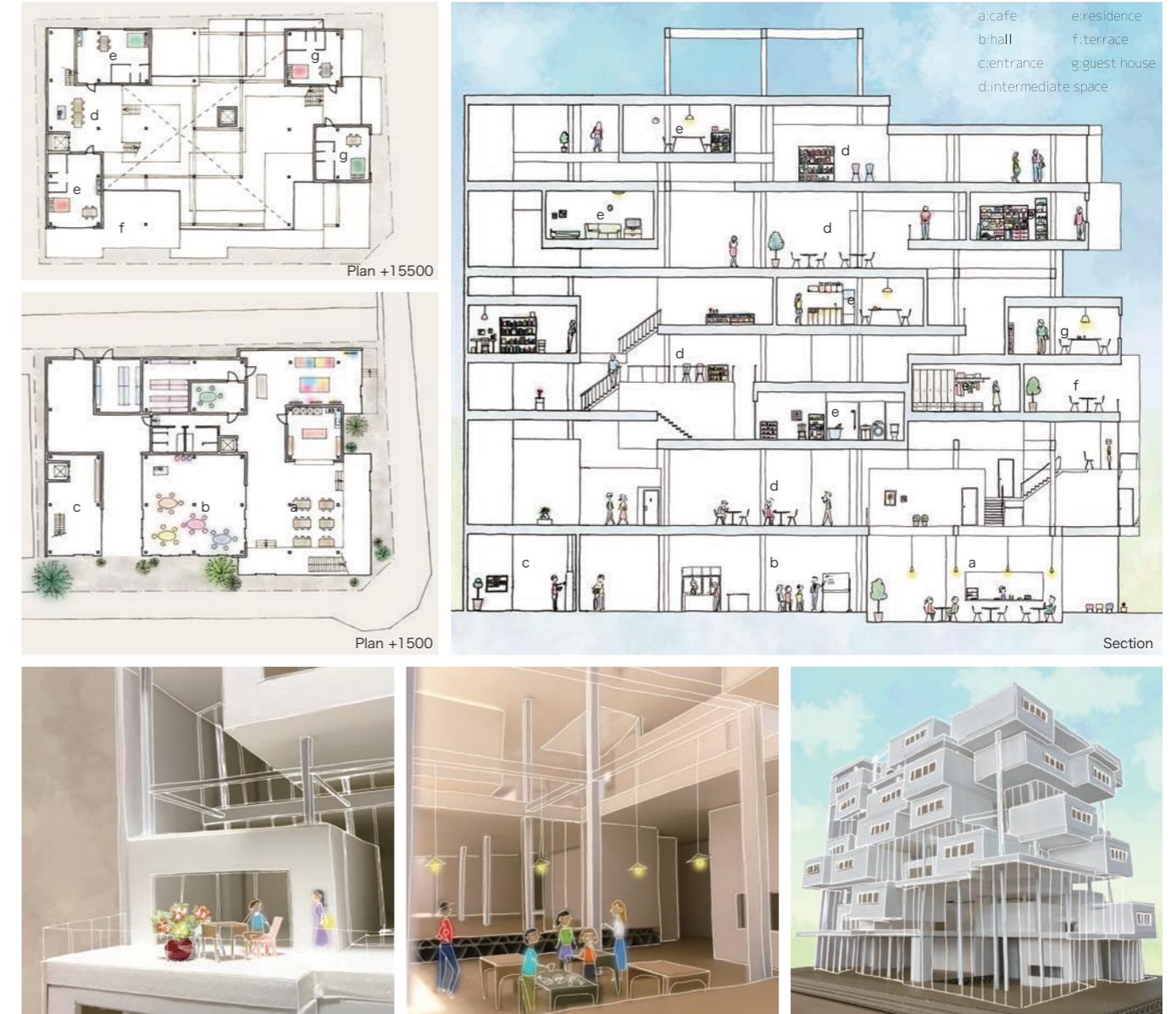
佐塚 将太
Shota SAZUKA

消える境界の果てに
Boundary disappear



前田 沙希
Saki MAEDA

スキマ ー共有部における付加価値の共有ー
Gap -Share added value in intermediate space-



担当

石田 敏明（教授）、曾我部 昌史（教授）、田野 耕平（特別助手）、木島 千嘉（非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所）、八島 正年（非常勤講師、八島建築設計事務所）

Toshiaki ISIDA (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Kohei TANO (Assistant Professor), Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates), Masatoshi YASHIMA (Guest Lecturer, Yashima architect and associates)

木村 捷希（M1、TA）、市川 貴一（M1、TA）

Kazuki KIMURA (M1, Teaching Assistant), Yoshikazu ICHIKAWA (M1, Teaching Assistant)

総評

建築デザインII(3年前学期)は二つの課題を課しているが、図面表現はCADではなく手描き図面を要求している。それぞれ現存する具体的な敷地を指定し、時間的には一課題につき7~8週で第一課題は街中の積層型商業施設、第二課題は低層の教育施設で規模や用途が異なる課題である。どちらも現地調査を行い、調査レポートを課し、周辺環境や地形を読み取り、配置やボリュームの大きさ、建物用途や諸機能の理解など建築計画的アプローチと架構デザインが要求される課題である。

第一課題の「六角橋ミニシアターコンプレックスと広場の設計」は白楽駅前のかつて、白鳥座という映画館があった二面道路の角地の敷地で、隣接地には低層、中層の住宅がある。大中小のミニシネマのボリュームの構成と六角橋商店街との関わりなどを考え、広場とのつながり方など、いかに地域に開かれた施設するかが求められた。外部から映画館内部への段階的アプローチの誘い方や地域への開き方など、上位のいずれの案も積層された断面計画と複合した諸機能との接続の仕方が評価されたが、映画館という地域の社交場としての提案があっても良かったと思う。

第二課題の「教科教室型の中学校」は横浜キャンパスに近い松本中学校の敷地である。住宅地に囲まれたかなりの高低差のある敷地のため、地形の読み取りと施設配置、建築計画、外構計画が重要である。低層ではあるが、敷地及び施設規模が大きく、しかも地形と建物の擦り合わせと教科教室型という教育システムの理解に相当の時間を要したようである。

分散配置タイプの提案が比較的多かったが、敷地全体をどのように秩序づけ統合するか、また生徒のアクティビティ(生活行為)と居場所など如何に楽しい学校生活が創造できるかが求められた。均質ではない校舎から校舎への変化に富んだ移動空間と外構デザインが考慮された作品が上位に選ばれている。

今後、両課題ともに手描きによる空間表現力が課題となろう。

(石田)

非常勤講師 経歴

木島 千嘉
Chika KIJIMA



1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建建設入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

八島 正年
Masatoshi YASHIMA



1968年生まれ、1993年東京芸術大学美術学部建築科卒業、1995年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、1998年八島正年+高瀬夕子建築設計事務所共同設立、2002年八島建築設計事務所に改称

第一課題 六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

白楽駅前に広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスの計画である。渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。また周辺環境(計画地北側には集合住宅がある)にも十分に配慮すること。地域の核となる建築のデザインを要求している。

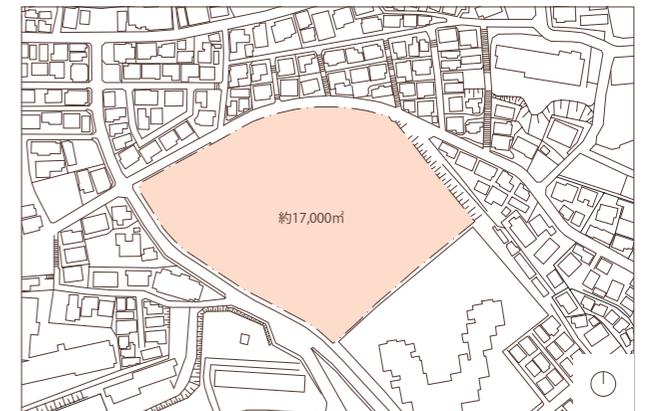
【設計条件】 敷地:神奈川県横浜市神奈川区白楽124
面積:約855㎡
建ぺい率:80% 容積率:400%



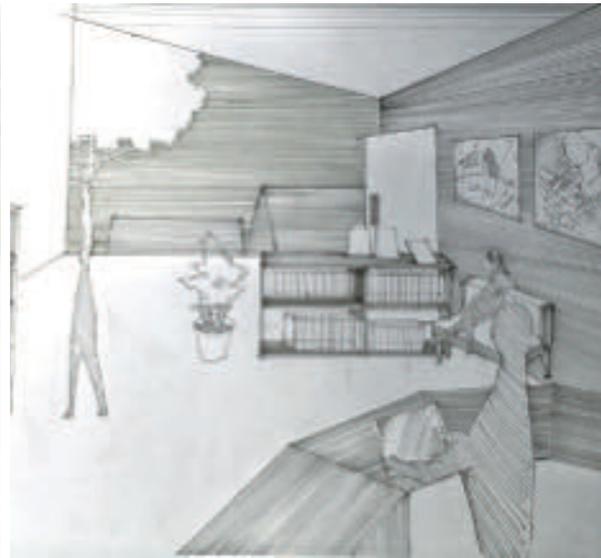
第二課題 中学校 (生徒たちの知的冒険)

都市中心部の住宅地に隣接する中学校の計画である。中学校の形式はこれまでの特別教室型(特別教室+普通教室)から進展した教科教室型とした。敷地は横浜の特徴的地形である谷戸地形の中に位置し、周囲は戸建住宅、公団住宅、分譲マンションなどが取り囲んでいる。傾斜面の地形を積極的に取り込みつつ周辺の状況に対応した、場所性をよく読んだサイトプランニングと環境デザインを心がけることが求められた。なお、本課題と並行して開講された講義では、オープンスクールから教科教室型の考え方や学校空間計画の工夫について解説がなされ、科目間の相乗的学習が企図されている。

【設計条件】 敷地:松本中学校神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町30-1 面積:約17,000㎡
建ぺい率:60% 容積率:150%



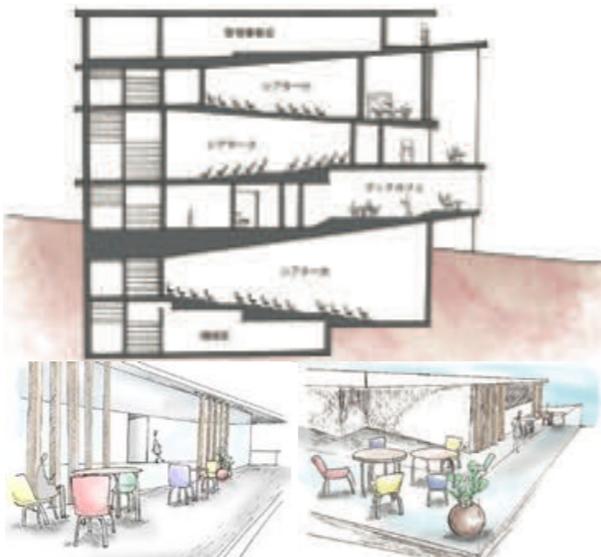
長谷川 舞
Mai HASEGAWA
道楽主義
Debauchery principle



佐塚 将太
Shota SAZUKA
森の回廊 ー自然と教育環境の新たな関係ー
A corridor forest



中山 実穂
Miho NAKAYAMA
人集う
People gather



松尾 祐奈
Yuna MATSUO
交わる交わす
Keep good company × Exchange a few



担当

山家 京子（教授）、石田 敏明（教授）、吉岡 寛之（助教）、 田野 耕平（特別助手）、アリソン 理恵（非常勤講師、一級建築士事務所teco）、川辺 直哉（非常勤講師、川辺直哉建築設計事務所）

Kyoko YAMAGA (Professor), Toshiaki ISHIDA (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Kohei TANO (Assistant Professor), Rie Arison (Guest Lecturer, Yashima architect and associates), Naoya KAWABE (Guest Lecturer, NAOYA KAWABE ARCHITECTS)

佐藤 滉子（M2、TA）、櫻井 浩平（M1、TA）、三輪尚生（B4、SA）、金井賢三（B4、SA）

Hiroko SATO (M2, Teaching Assistant), Kohei SAKURAI (M2, Teaching Assistant), Naoki MIWA (B4, students Assistant), Kenzo KANAI (B4, students Assistant)

総評

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。昨年度まで住宅を含む3つの課題としていたが、今年度は住宅と短期課題をやめ、新たに都市型の積層型建築を加えた2課題とした。いずれも建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを促している。

「第I課題：公園に面して建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながら、かなりのヴォリュームを占める開架図書室をどう扱うかが鍵となる。鈴野さんは2階に開架図書を配置し、折れ曲り屋根と大きなボリュームを包み込むデザインとした。池原さんは土を盛り高低差をつけた敷地全体にアクティビティを分散配置し、ふわっと屋根を架け、これまでにない図書館のあり方を提案した。「第II課題：関内に建つオフィス」は関内に8層程度の本社ビルを計画する課題である。トレミュロさんは関内のグリッド型街路を意識した斜めの壁を挿入し、その壁を抛り所とする建築を構想した。金谷さんは周辺環境を丁寧に読み解き、桜通りをイメージした枝状の壁、連続する吹抜け、環境に配慮した

木質ルーバーなど、精度の高いデザインを提案した。
（山家）

非常勤講師 経歴



アリソン 理恵
Rie ARISON
1982年生まれ、2005年東京工業大学工学部建築学科卒業、2009年NMBW(オーストラリア)にてインターンシップ、2011年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学、2011年～2015年一級建築士事務所ルートエー勤務、2014年～2015年アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室勤務、2015年一級建築士事務所teco設立

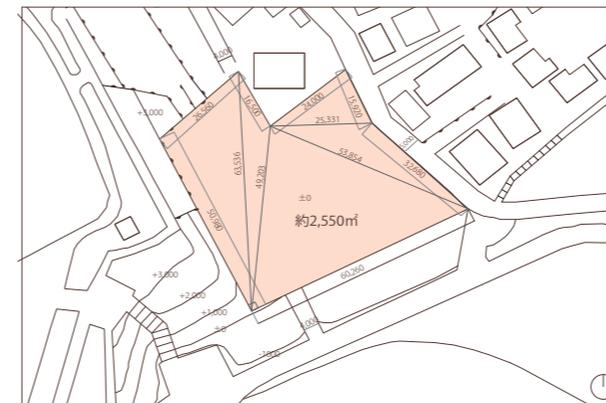


川辺 直哉
Naoya KAWABE
1970年神奈川県生まれ、1994年東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年 東京芸術大学大学院修士課程修了、1997-2001年、石田敏明建築設計事務所、2002年川辺直哉建築設計事務所設立、現在 東京理科大学、法政大学、芝浦工業大学、東京電機大学にて非常勤講師

第一課題 公園に面して建つ地域図書館

岸根公園に面する敷地に地域図書館を計画せよ。図書館は「知識資源の管理と新しい知識創造の場」である。書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本的機能を満たしつつ、図書館の今後の在り方について考えること。また、地域図書館は中央図書館等大規模図書館を縮小した施設ではなく、コミュニティ施設としての機能ももっている。周辺の都市空間構成を読みとり、岸根公園との空間的つながりを意識した地域図書館を計画しなさい。

【設計条件】 敷地：神奈川県横浜市港北区岸根町725
面積：約2,550㎡
建ぺい率：60% 容積率：100%



第二課題 関内に建つオフィス

近年、まちに開く建築が話題となっています。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものです。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言えます。一方、オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかという閉じていく傾向にあります。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されています。ここでは、空間的にもプログラムのにも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求めます。

【設計条件】 敷地：神奈川県横浜市中区住吉町3丁目
面積：約565㎡
建ぺい率：80% 容積率：700%



池原 なつ子
Natsuko IKEHARA

ひとびとを繋ぐ屋根
Roof that connects people



三浦 悠介
Yusuke MIURA

図書間
Library



金谷 優汰
Yuta KANAYA

OFFICE F
office f



坂本 理久
Riku SAKAMOTO

多種多様な空間
Various spaces



清水 駿甫
Shunsuke SHIMIZU

浮遊する図書館
Floating library



鈴野 佑季
Yuki SUZUNO

Various height
Various height



トレミュロ 香炉栄 雪
Chloe Yuki Tremureau

the way
the way



山本 麻貴
Maki YAMAMOTO

路地と4つの塔
Alley and four towers



担当

中井 邦夫 (教授)、吉岡 寛之 (特別助教)、上野 正也 (特別助教)、須崎 文代 (特別助教)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、井原 佳代 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)、井原 正揮 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)
Kunio NAKAI (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Masaya UENO (Assistant Professor), Fumiyo SUZAKI (Research Associate), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects), Masaki IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

三浦 みづき (M2, TA)、須山 高志 (M1, TA)、東田 萌 (M1, TA)、丹羽 貴行 (M1, TA)、中村 圭那 (B4, SA)、上川床 奈々 (B4, SA)

Mizuki MIURA (M2, Teaching Assistant), Takashi SUYAMA (M1, Teaching Assistant), Moe HIGASHIDA (M1, Teaching Assistant), Takayuki NIWA (M1, Teaching Assistant), Keina NAKAMURA (B4, Student Assistant), Nana KAMIKAWATOKO (B4, Student Assistant)

授業内容

- 1) トレース課題1「萩塚の長屋」 (設計: 藤野 高志) (鉛筆書き 1/100)
- 2) 模型製作課題1「萩塚の長屋」 (模型 1/100)
- 3) 設計課題1 (下記参照)
- 4) 模型製作課題2「神奈川大学 16 号館」 (設計: 楨文彦) (模型、1/100)
- 5) 設計課題2 (下記参照)

第一課題「提案型集合住宅」

住宅地内の敷地に、老夫婦のオーナーが所有し様々な世代の居住者とともに住む集合住宅を計画する。敷地は、四周で道路に面する三角形の区画であり、公園のそばの立地で、商店街にも近い。敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活像を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案/空間を求める。

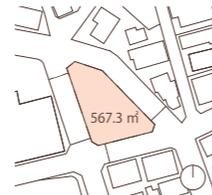
【設計条件】

敷地: 神奈川県西神奈川3-9-16

構造形式: 鉄筋コンクリート・壁式構造

地域・地区: 市街化区域、第1種住居地域

防火地域: 準防火地域 敷地面積: 567.3㎡ 建ぺい率: 70% / 積率: 200%



第二課題「神大ミュージアム・パーク」

神奈川大学21号館および駐輪場の敷地に、神奈川大学が所蔵する収蔵品を企画、常設展示する展示室やインフォメーションセンターを含むミュージアムと、学生や周辺住民の憩いの場となる広場を設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、16号館と共に大学の「ゲート・ゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間になることが期待されている。多様な活動を含み込み、可能性を最大限引き出す提案を求める。

【設計条件】

敷地: 神奈川県六角橋3丁目

構造形式: 鉄筋コンクリート・ラーメン構造

地域・地区: 第二種中高層住居専用地域 防火地域: 準防火地域

敷地面積: 1017.6㎡ 建ぺい率: 70% (法定は60%) 容積率: 150% (最大)



非常勤講師 経歴



鈴木 信弘
Nobuhiro SUZUKI
1963年生まれ、1986年神奈川大学卒、1988年神奈川大学大学院修士課程修了、1988年-1996年東京工業大学工学部建築学科助手、1994年鈴木アトリエ一級建築士事務所開設



井原 佳代
Kayo IHARA
1979年東京都生まれ、2002年神奈川大学工学部建築学科卒、2004年キングストン大学大学院美術・デザイン・建築学部卒、2009年-2016年シーラクスアンドアソシエイツ、2016年株式会社ihrmk一級建築士事務所参加

ゲスト講師 経歴



井原 正揮
Masaki IHARA
1980年福岡県北九州市生まれ・愛知県豊田市育ち、2002年名古屋大学工学部社会環境工学科卒、2006年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻卒、2007年-2014年シーラクスアンドアソシエイツ、2015年ihrmk開設、2016年株式会社ihrmk一級建築士事務所設立

田中 裕 Yutaka TANAKA

提案型集合住宅

息の緒
Ikinoo



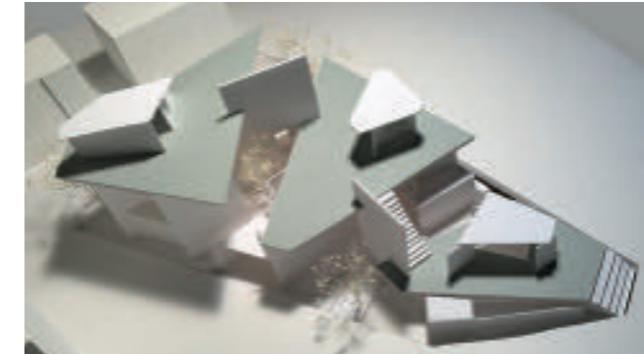
トレミュロ 香灯栄雪 Chloe Yuki TREMUREAU

KABE
Kabe



池原 なつ子 Natsuko IKEHARA

町の下でくらす
Living under the town



川浦 光 Hikaru KAWAURA

ROKUJIGEN
Rokujigen



益山 亮太 Ryota MASUYAMA

垣間見
Catch a glimpse



三浦 悠介 Yusuke MIURA

結ぶ
Connect



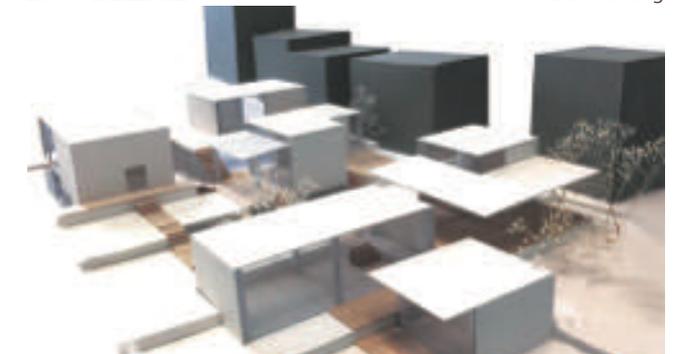
古城 偉央理 Iori KOJO

つながり
Connection



武市 拳斗 Kento TAKEICHI

学びの風
Wind of learning



担当

中井 邦夫 (教授)、上野 正也 (特別助教)、田野 耕平 (特別助手)、鈴木 信弘 (非常勤講師、鈴木アトリエ)、井原 正揮 (非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所)

Kunio NAKAI (Professor), Masaya UENO (Assistant professor), Kohei TANO (Research Associate), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Masaki IHARA (Guest Lecturer ihrmk Architects)

原山 雅也 (M2, TA)、須山 高志 (M1, TA)、東田 萌 (M1, TA)、枝川 和樹 (M1, TA)、中村 圭那 (B4, SA)、上川床 奈々 (B4, SA)

Masaya HARAYAMA (M2, Teaching Assistant), Takashi SUYAMA (M1, Teaching Assistant), Moe HIGASHIDA (M1, Teaching Assistant), Kazuki EDAKAWA (M1, Teaching Assistant), Keina NAKAMURA (B4, Student Assistant), Nana KAMIKAWATOKO (B4, Student Assistant)

授業内容

- | | |
|---|--|
| 1) トレース課題1
「ヒアシンス・ハウス」(設計: 立原 道造)
意匠図 (鉛筆描き、1/30) | 4) トレース課題2
「浜田山の家」(設計: 吉村 順三)
詳細図 (鉛筆書き、1/50、1/20) |
| 2) 模型製作課題1
「ヒアシンス・ハウス」
(白模型、1/30) | 5) 模型製作課題2
「浜田山の家」(軸組模型、1/50) |
| 3) 設計課題1 (下記参照) | 6) 設計課題2 (下記参照) |
| | 7) 模型製作課題3
屋久島の家 (設計: 堀部 安嗣)
(軸組模型、1/50) |

第一課題「クラインガルデン」

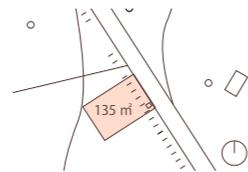
ある家族が、横浜市神奈川区羽沢町の菅田・羽沢農業専用地区内の一面に、農業用地を借りて趣味の農業を営むことになった。積極的にスローフード・スローライフを進めるための、自然環境に配慮した「小屋」を設計して下さい。

【設計条件】

- ・小屋の面積は自由だがなるべく小規模(10畳以下)が望ましい。

なお、最低限、次のことができること

- ・農作業の準備、農具の収納・簡単な炊事
- ・トイレ・談話、くつろぐ(仮眠程度ができる場、原則宿泊はしない)
- ・内外を使って、15人程度(3~4家族)で行う収穫祭



第二課題「セカンドハウス」

河口湖に浮かぶ「鶯の島」に、セカンドハウスを設計して下さい。既成の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待します。

【設計条件】

- ・原則として木造とし、架構を具体的に表現すること。
- ・延床面積は、100㎡前後とし、外部空間は自由に設定して下さい。
- ・配置は島全体から好きな場所を選んでください。

城所 真緒
Mao KIDOKORO

クラインガルデン

自然と暮らす家
Nature and the home where I live



井口 翔太
Shota IGUCHI

through hat
Through hat



檜原 杏奈
Anna NARAHARA

人で繋がる小屋
The house which connects with a pearson



福士 詩織
Shiori FUKUSHI

Lead House
Lead House



三谷 隆介
Ryusuke MITANI

縦長の家
Oblong house



谷本 優斗
Yuto TANIMOTO

セカンドハウス
隙間から見える景色
The scenery seen from a gap



遠藤 麻理奈
Marina ENDO

Round and round
Round and round



井口 翔太
Shota IGUCHI

スキマの家
Sukima house



檜原 杏奈
Anna NARAHARA

恵る
MEGURU





NEWS

課外活動ほか
学外コンペ
留学生レポート

テクノサークル 建築をつくる会

活動の目的

建築デザイン教育において、設計演習課題の中では頭で考え仮想の建築を組上げるところで終わり、実際に材料にふれ、身体を使って建築物をつくり出す機会は乏しい。実社会における設計活動においては、材料を理解し、その特徴を取り込むプロセスが重要であり、それが設計活動の魅力といえる。その中で、製作に至るさまざまな段階での共同作業における行動力や調整力の育成と、学年の枠を超えた交流の場が形成されることを目的とする。



具体的な活動

日本の古くからある住宅には、縁側という空間がある。軒下の縁側空間は、心地良い日向となる快適な場所や、庭のような外の風景を眺める場所のように、自ずと人が居座りたくなる空間であると考えた。そこで私たちは、この縁側空間のような内と外との間の緩衝空間に着目し、その要素を抽出したモックアップを制作した。



第6回大東建託賃貸住宅コンペ 既存価値を上げる賃貸住宅 - 豊島区編 -

庄子 利佳、佐塚 将太、鈴木 啓生、前田 沙希
[最優秀賞]



「第6回大東建託賃貸住宅コンペ 既存価値を上げる賃貸住宅 - 豊島区編 -」において、庄子利佳さん(当時曾我部研究室修士2年)、佐塚将太さん、鈴木啓生さん、前田沙希さん(3名共、当時曾我部・吉岡研究室3年)の「小さな家の大きな集まり」が最優秀賞を受賞しました。



トウキョウ建築コレクション 2018 稲岡 寛之[11選]

代官山ヒルサイドテラスにて毎年開催されている「トウキョウ建築コレクション」にて、稲岡寛之さん(当時曾我部研究室修士2年)の「参道の編集」が一次審査通過作品の11選に進出されました。作品の詳細は30~33ページに記載されています。



ひろしま建築学生チャレンジコンペ 2017

詹 曹俊[審査委員長特別賞]



魅力ある建築物の創造に向けた人材育成の一環として行っている、「ひろしま建築学生チャレンジコンペ2017」にて、詹曹俊さん(当時石田研究室4年)が審査委員長特別賞(審査委員長 西沢立衛)を受賞しました。

第29回 JIA 神奈川 WEEK 横濱建築祭 2018 大学卒業設計コンクール

矢吹 拓也[総合資格学院賞]

みなとみらい線馬車道駅にて毎年開催されている「横濱建築祭の大学卒業設計コンクール」にて、矢吹拓也さん(当時石田研究室4年)の「INTERMEDIARY SPACE」が総合資格学院賞を受賞しました。作品の詳細は50~51ページに記載されています。



第41回 学生設計優秀作品展 - 建築・都市・環境 - 馬鳥 夏美[レモン賞]

レモン画翠が主催する、「学生設計優秀作品展」にて、馬鳥夏美さん(当時曾我部・吉岡研究室4年)の「ひとの灯火 - 空き家改修による大三島らしい暮らしの場の提案 -」がレモン賞を受賞しました。作品の詳細は54~55ページに記載されています。



フランス留学記事

中井研究室修士 2 年
原山 雅也
 Masaya HARAYAMA



2017年8月末より留学先のフランス・モンペリエへと旅立った。モンペリエは、南仏にある地中海近くの街である。温暖な気候で、日本と比べると8月末でもとても過ごしやすかった。街中には、様々な広場が点在し、カフェ・レストランが隣接する広場や木々が生い茂った広場、住宅に囲まれた広場などがあり、そこで人々は、談笑したり、コーヒーや読書を楽しんでいる様子がかがえた。広場が人々の日常生活を支える空間となっていることが実感できた。学校生活は、苦勞と楽しさの連続であった。それでも非常に楽しい留学生活であった。そしてそこで感じたことは、色々な面で境界が少ないということだ。人付き合いや先生との関係でもすぐフレンドリーであるということが実感できた。そういう気質だからこそ海外では屋外のオープンスペースが生活の一部として定着しているのだと思う。

建築旅行へは10ヶ月間に、さまざまな国を巡ることができた。

そこから分かったことは、学部生の時に海外に行くことが重要であると感じた。私自身は、学部4年間日本全国をまわることをしていた。しかし、それだけではディプロマの時に日本的な考えによるアイデアのみで思考し、出来上がるのみである。実際に海外をまわることで得られる新感覚はとても貴重なものであると感じた。そのため、この留学期間に色々なところに訪れた。そして、教科書や雑誌で見ていた建築を目の当たりにしたときの感動は一生忘れないと思う。今、留学に行くか行かないかで迷っている方々や海外は不安だと思っている方々には是非とも一歩踏み出すことをおすすめしたい。



フランス留学記事

曾我部研究室修士 2 年
田中 啓介
 Keisuke TANAKA



私は、国立モンペリエ高等建築学校に留学しています。初めてのヨーロッパでの生活を経験してみて、やはり日本と勝手が違って、最初のうちは戸惑いました。トイレがよく詰まったり、シャワーでお湯が出なかったりと、生活の面では苦勞することが多々ありますが、生活するうちに慣れました。

大学での授業は、日本と違ってグループでの活動がメインとなります。授業中は基本的にフランス語で、先生とのエスキスチェックの際にはスタジオの友達が英語に訳してくれて理解を得ています。留学を考えている人は、フランス語を少しでも勉強していくといいと思います。

留学することの最大の利点として、近隣の国々にバカンスなどを利用して簡単に行けることです。コルビジェの建築をはじめ、ミースやハンス・シャロウン、アルヴァロ・シザ、ポフィルなどの建築を数多く見ることができています。日本で本の中でしか見ることができなかった建築が、実際に自分の目で見れることは大変いい経験になっています。学生のうちにこれほどの経験ができることは、これから建築を学んでいく上で財産になると感じています。

留学する上で、躊躇している人が多いと思いますが、留学して損することはないです。留学に行ける環境があるのに行かないという選択は本当にもったいないです。ぜひ留学に行くことをお勧めします。



日本留学記事

内田・須崎研究室修士 1 年
劉 洪君
 Hongjun LIU



私は、神奈川大学に留学しています。白楽の六角橋商店街では美味しい料理を食べることができます。白楽駅を降り、歩いて10分ほどのところに横浜キャンパスがあります。横浜キャンパスは山の上にあるため、毎日学内からきれいな風景が見ることができます。

日本生活の最初の1ヶ月間は、日本語学校や寮などの日常生活に慣れることが難しかったです。その後、大学付近のアパートでの一人暮らしが始まりました。授業を受け、アルバイトをし、休みの日には日本の有名な場所へ旅行するうちに日本の生活に慣れてきました。

そうして一年が経ち日本語学校を卒業、神奈川大学へ研究生として入学し、内田先生の学生として建築学の勉強を始めました。

内田・須崎研究室では建築の歴史に関することを研究しています。私の研究テーマは建築の歴史に関する「家相」についてです。「家相」とは、元々中国に存在する「風水」が日本へ伝わり独自に変化したものです。日本の建築の特徴に合わせて変化した「家相」を研究することはとても面白いのでやりがいがあります。

研究室では、毎日内田先生の授業を受け、有名な建築を見学したり、建築学の書物を読みます。生活は難しく、大変ですがとても楽しみながら生活しています。留学経験は建築の勉強だけではなく、私生活自体も勉強です。留学が終わり中国へ戻った時、私はより充実した暮らしができる自信を持って言うことができると感じています。



日本留学記事

内田・須崎研究室修士 2 年
李 蓁
 Zhen LEE



I was scheduled to join the Uchida's lab in April 2017. However, I came to Japan until June due to the visa. At the very start, I thought that I might have problems in getting along with the rest because of the late entrance and was afraid to catch up with the rhythm of the class.

But at the moment when I entered the lab, I knew all my concerns were unnecessary. Teachers explained questions to me patiently until I fully understood their interpretation. Professor Uchida also cared about my daily life, such as accommodation affairs and eating habits and my study. I have to confess that I was deeply moved by those heart-warming things.

After the first summer vacation, all the people in the lab went to Shanghai for a week of studio trip. We lived in the same hotel and went to visit the local landmarks and historical buildings. The atmosphere of the whole trip was very very harmonious.

Not just the friends of the Uchida's lab, I was also surprised by the students in the first grade. We joined a workshop before the summer. Every three participants were asked to make a program. From that experience, the different thought pattern in architecture between the Japanese and the China deeply impressed me.

I'm very proud to be a part of the Implementation Committee of the workshop in East Asia in this August. I will endeavour to enrich my life in here and I'm greatfull for all the teachers and classmates.



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室

Phuong NGUYEN

国立モンペリエ高等建築学校より



I was interested in Sogabe's laboratory since I read the book about Kanagawa University at my home University (ENSAM). So, it wasn't a surprise that I choose this laboratory when I come to Japan.

First, we were working on the real projects, which was really awesome. We were working with the context, we made the trip to the project 'side in Minami-Cho to see the site and to talk with people in order to understand the environment. It was also a fruitful experience for me. We have had possibility to participate in conferences or to do presentations. But the fact that I can't speak Japanese prevented me a lot from gaining more knowledge that this laboratory offers because a lot of activities were in Japanese.

Then, the organisation was a little bit messy for us but I think for Sogabe's laboratory it was a new a challenge to join exchange students in their laboratory as well. But they were very kind, they not only help me in the laboratory but also with my internship and my thesis.

So, sometimes it was hard to join the work in the laboratory but it is normal because you come to the new environment with the unknown language but people always tried to help you so it was really worth it! I have gained knowledge not only in architecture but also a lot in Japanese culture and thank you!



日本留学記事

曾我部・吉岡研究室

Myrto TOMARA

国立モンペリエ高等建築学校より



My exchange year in Kanagawa University has been a great experience in my student and personal life. I was looking forward to knowing more about the Japanese architecture, culture and history. I feel glad to have been part of Prof. Sogabe's studio. The way this laboratory works is very different from the one back in my home university. I was very lucky to follow one of the teams to work-trip to Minami cho, where 2 projects were in progress.

I can't hide the fact that the language barrier has been inconvenient from the beginning. All classes were in Japanese, which was unfortunate to us, since we have been told that we didn't need to learn the language before coming. Because of that, I couldn't avail myself of the available material in the studio. Besides that, the whole team was always very kind and friendly. They helped us as much as they could with the Japanese-English translation and with our personal projects (thesis, internships).

For a short period, I had the opportunity to work as a part-time job at Riken Yamamoto & Field office by making models for an international competition.

During this year, I discovered so many surprising things about Japan; things that made me see architecture and space itself in another way. It was a real one-life experience. Finally, I would like to thank my professors from the Architecture department and the Cross-Culture department for making my exchange so rewarding.



神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻 沿革

- 1928 米田吉盛が「横浜学院」創設(旧横浜市中区桜木町)
- 1929 専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
- 1930 六角橋に移転、横浜キャンパス開設(5月15日 創立記念日)
- 1949 学制改革により「神奈川大学」設置
- 1952 神奈川大学整備拡張計画(設計:山口文象/RIA)
- 1965 神奈川大学工学部建築学科創設(初代学科長:谷口忠教授、定員80名)、
8号館(建築学科研究室、製図室)竣工
- 1967 12号館(建築学科総合実験棟)竣工
- 1971 大学院工学研究科建築学専攻修士課程設置
- 1973 かな会(建築学科同窓会)設立
- 1982 同济大学(中国)、武漢理工大学(中国)と学術交流協定を締結
- 1985 建築学科創設20周年記念誌発刊
- 1990 大学院工学研究科建築学専攻博士課程設置
- 1994 建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
- 1998 横浜キャンパス再開発開始(2002年完了)
- 2002 成均館大学校(韓国)と学術交流協定を締結
- 2003 RAKU(デザインコース年鑑)vol.1発刊
- 2005 国立台湾科技大学(台湾)と学術交流協定を締結
- 2006 建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入
第1回東アジア大学建築学術交流セミナー(以後毎年開催)
日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
- 2008 神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
- 2010 デンマーク王立芸術アカデミー建築大学(デンマーク)と学術交流協定を締結、交換留学(部局間)開始
- 2013 国立台湾科技大学(台湾)と交換留学(部局間)開始
- 2013 国立モンペリエ高等建築学校(フランス)と学術交流協定を締結、交換留学(部局間)開始
- 2015 建築学科創設50周年



8号館

RAKU バックナンバー



RAKU は、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行しています。第6号以降は毎号多彩なテーマの特集を組み、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。vol.12から新たに学外から編集者の長島明夫氏、デザイナーのqp氏を起用し、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみ下さい。(建築デザインコース主任 中井邦夫)

編集/市川貴一、印東尚朗、木村捷希、武藤匠、加藤正佳、東田萌、下山智加、枝川和樹、丹羽貴行、須山高志、森島俊平、田村駿介、城間リカルド、櫻井浩平、松川英莉奈、李泰、岡本晴美、小田凌大朗、門田大希、浜松謙太、早川史洋、水上翔太、中村圭那、内山大輝、太田朗人、王天浩、馬島夏美、諸橋克哉、楊思航、金井賢三、竹島大地、米山昂佑、野々村明佳里、李林軒、劉洪君

監修/中井邦夫、田野耕平、吉岡寛之、上野正也、須崎文代
特集ページ編集/長島明夫
表紙写真/qp
デザイン/qp

「RAKU Vol.14」 発行/神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース
発行日/2018年7月30日 [横浜キャンパス] 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

